

茨城県八郷町真家地区における生活形態の変容

田林 明・林 秀司・吉村忠晴
中村康子・松井圭介・三木一彦

I はしがき

日本の農業と農村は1960年代以降大きく変化した。特に巨大都市、東京の影響を強く受けてきた関東平野ではその傾向が著しかった¹⁾。しかし、その変化の様相は場所により地域により様々に展開してきた。ここで取り上げる茨城県新治郡八郷町は、東京都心から北東に直線距離で70kmのところにあるが、周囲を山地に囲まれ、起伏の多い盆地をなしていることもあって、都市化の影響が比較的少ない地域のようにみえる。そこには手入れの行き届いた水田と畑地そして果樹園などからなる豊かな農業景観が広がり、農業に主力をおく伝統的な農村生活が生きづいてるように思われる。

しかし、都市化の波は、この地域にも確実に浸透しており、現実にはかつてのような強い村落共同体を基盤とした農村生活はもはやみられなくなった。この地域では、1950年代まで米や麦、雑穀、イモ、豆類などの伝統的な主穀作物生産が中心であったが、1960年代には、畜産物や果樹、花卉などの新しい商品作物生産が盛んになってきた²⁾。他方では、1970年代から急速に兼業化が進展してきたが、一部では生産性の高い、自立経営農家が形成されている。

現在の八郷町の農村をみると、農外就業が卓越し、それと組み合わせられる粗放的な農業経営が一般化している一方、年間売上高が数億円にものぼる収益性の高い商品農業経営もあり、また老人が

専門的に果樹生産を行っているなど、様々なものが混在している。さらに、伝統的な建築様式の大きな家屋の農家を主体とした古い集落のはずれには新しい住宅が点在し、新旧住民の混住化が進んでいる。そして、農業的土地利用をもう一度詳細にみると、放棄された畑や荒れたままの果樹園なども部分的に存在している。このようなことから、現在の農村の様相は複雑であり、その全貌を把握することは、容易でないことがわかる。

この報告は、このような多様で絶えず変化しつつある現代の農村の様相を理解するために、八郷町真家地区を、土地利用と景観、農業を中心とした経済活動、そして生活組織と行事という側面から記述・分析し、その特徴を明らかにしようとするものである。

研究対象地域の真家地区は、八郷町を構成している8つの旧町村の1つである旧園部村の1大字であり、八郷町では最も東に位置している。西部の山麓斜面から東部の低地に東西に細長く広がっており、中央には園部川の上流部が2条にわかれて狭くて浅い谷をつくっている。八郷町の中では国道6号線や常磐自動車道、JR常磐線に最も近く、都市化の影響を受けやすい。他方、八郷町では専業農家や第一種兼業農家が多い地域の1つでもある。八郷町の中心部である柿岡の市街地から北東6km、常磐線羽鳥駅から北西に3kmの距離にある。

ところで、大字の真家地区には行政の単位である区として、山根と小堀、真家、郷中、真家宿、

園中、白幡、長原の8つがあり、それらが日常生活の単位である集落とおおよそ対応する。しかし、園中は桑ノ内と千本という2つの集落をまとめて1つの区となっている。また、桑ノ内のことを園中と呼んだり、郷中のことを西ノ内と呼ぶこともあり、誤解を生じやすいので、この報告ではあらかじめ以下のように地名の呼称を統一することにした。まず、旧町村である園部は旧園部村、大字真家を真家地区と呼ぶことにする。さらに、それぞれの区と園中を構成する桑ノ内と千本、そして郷中の別名の西ノ内を含めて、例えば山根集落や小堀集落というようにした。また、小字地名については地名に字をつけ、例えば字安場や字全龍寺とし、その他の名称(班や組の名前を含む)には特に呼称をつけずに、地名だけを記載することにする。なお、今回の調査では長原集落を対象から除いた。

1990年の国勢調査によると、真家地区の総世帯数は239で、人口は1,030であった。構成員数別世帯をみると、5人家族が46戸と最も多く、これに6人と4人が続いている。平均家族数は4.31人でほぼ八郷町の平均に近いが、茨城県の平均よりも1人、全国平均よりも1.3人ほど多い。就業者総数は573人で、農業従事者が最も多く201人で全体の35.1%を占め、これに製造業従事者の119人(20.8%)、卸・小売業の71人(12.4%)、サービス業の69人(12.0%)、建設業の60人(10.5%)が続いていた。

Ⅱ 土地利用と景観

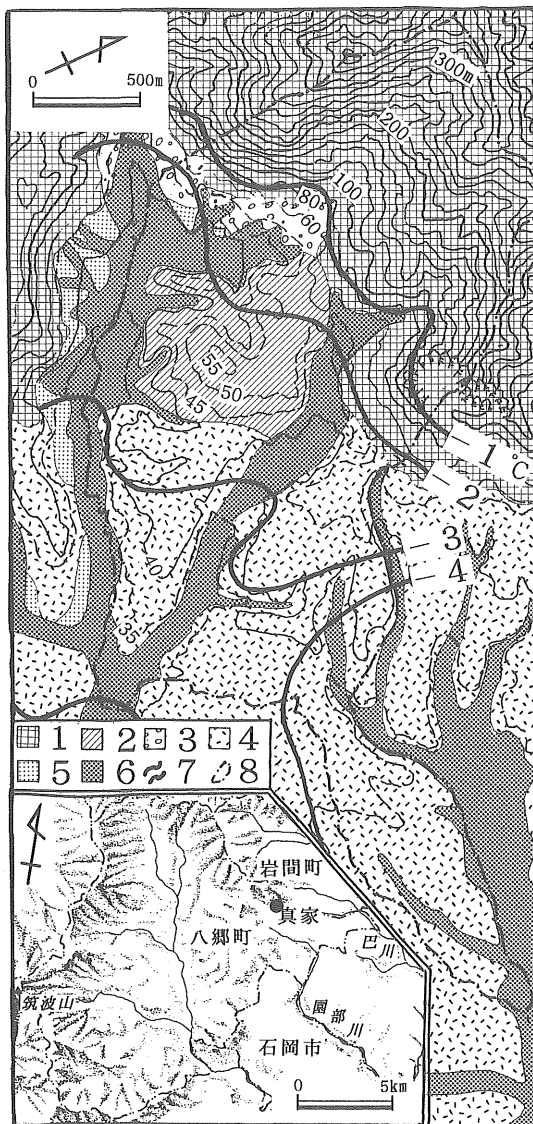
Ⅱ-1 自然的基盤

1) 地形と土壌

土地分類基本調査によれば、真家地区は地形的にみると、筑波山東側山塊と八郷丘陵、東茨城台地、園部川低地に区分される³⁾(第1図)。狭い範囲に様々な地形がみられるのが、この地域の特徴である。

真家地区の北西部には筑波山東側山塊が延び、この山麓部に山根集落と真家集落が位置する。この山塊は古生層からなり、ホルンフェルスで構成

されている。ホルンフェルスは真家集落に近い部分では砂がちであるが、その他の部分では泥がちである。これらの岩石を母岩とするため、山地および山麓部の土壌は「ネンド」と呼ばれ、粘土質で礫を含んでいる。また、比較的平坦な山頂付近



第1図 八郷町真家地区の自然的基盤

(茨城県(1981,1983), 吉野(1961)により作成)

1. 山地 2. 丘陵 3. 山麓緩斜面 4. 台地 5. 低位段丘 6. 低地 7. 冬季最低気温の等温線 8. 大字真家の範囲

と山麓部では、赤味を帯びた火山灰土壌が混じる場合もある。

筑波山東側山塊の南側には八郷丘陵の東縁部が広がり、この丘陵上には小堀集落、郷中集落、白幡集落が位置する。八郷丘陵は更新世の砂層で形成されており、その上を関東ローム層が覆っている。地形的にみると、部分的には標高50m前後の平坦面が残されているものの、全体的には開析が進んでいる。そのため、全体的な形状としては凸型をしており、中央部の平坦面の両側では傾斜地となっている。また、小堀集落周辺のように平坦面の少ない部分では表土が薄くなっている。土壌は赤味を帯びた火山灰土壌となっており、住民によって「アカバッケ」と呼ばれている。

八郷丘陵の南側には、東茨城台地がつづき、この台地上に白幡、千本、真家宿などの集落がある。丘陵面の開析はあまり進んでおらず、標高40m前後の平坦面が広がっている。この付近の関東ローム層の厚さは3～5mである。土壌は黒味を帯びた火山灰土壌であり、八郷丘陵上の土壌よりも柔らかく、表土が厚い。この土壌は、住民によって「クロボク」と呼ばれている。

真家地区の西側には園部川の上流部に沿って、幅100～200mの沖積低地が広がる。また、八郷丘陵には幅40m前後の谷が入りこんでいる。地元住民は園部川低地のことを「タ」と呼び、丘陵を開析する小規模な谷のことを「ヤヅ」と呼ぶ。一方、真家地区の東縁では巴川の支谷が入り、「ホック」と呼ばれる幅20m前後の狭く細長い谷底平野をつくっている。低地の土壌の多くは多湿黒ボク土である。なお、山際の谷頭付近の低地は肥沃な細粒グライ土壌である。

以上のように、真家地区は山地・山麓部、丘陵部、台地部、低地部に分けられる。さらに、それぞれの地形によって、土壌条件が異なる。

2) 気温

真家地区の気候は地形の影響を受けている。とくに、冬季のよく晴れた風のない日の朝には、気温の逆転現象が生じる⁴⁾。真家地区の北西部では、三方から山がせまる谷間のような地形であるた

め、山麓の集落から比較的近い部分に気温の逆転層が現れる。冬季の最低気温の分布は第1図にみられるように、集落の背後にある斜面では、高度の高いところほど気温が高くなっている。斜面中腹ばかりでなく、山麓部でもその影響が現れ、山根集落、真家集落では、台地部よりも2～3度ほど温暖である。また、山地に比較的近い小堀集落や郷中集落付近でも、千本集落や真家宿集落よりも1～2度ほど温暖である。一方、園部川低地のような谷底部では一般に冷気湖が形成され、周囲より一段と低温になる。

このような気温の差異のため、真家地区のような狭い範囲でも、場所によって霜害の危険性が異なっている。1991年5月12日に、茨城県下では多くの地域で遅霜が降りた。聞き取り調査によれば、真家地区における降霜の範囲は県道よりも南側であり、小堀、山根、真家などの集落周辺では、低地との境界付近を除いて霜害を免れることができた。

以上のように真家地区では気温の逆転現象や周囲の地形の影響によって、冬季の最低気温分布は山地中腹で最も高くなり、山麓部から丘陵部、台地部、低地部へいくにしたがって低くなっている。

真家地区の自然的基盤は、集落ごとに性格が違っており、狭い範囲にもかかわらず、地形や土壌、気温の状況が大きく異なる。

Ⅱ－2 集落の形成過程

現在の真家地区は、明治期に入るまで真家村として一村をなし、江戸期には1つの藩政村であった。真家地区の起源や発展過程を示すような文書類は極めて限られているため、ここでは、地区内に豊富に残されている石造物類を手掛かりとするとともに(写真1)、伝承や文書類も参考にする。

真家村の起源については、「八内七弁天」という伝承が伝えられている。大内・西ノ内・琴内・堀ノ内・北ノ内・嘉納内・鍛冶内・桑ノ内という8つの内とよばれる区域(いくつかは字名と一致する)と、地井房・全龍寺・松原・堀ノ内・大内・白幡・千本にある7つの弁天(第2図のa～g)



写真1 八郷町真家地区の石造物
(1993年5月撮影)

を中心に集落が発展してきたという言い伝えである。この伝承は真家地区で広く知られており、今日でも、弁天の位置に石の小祠がまつられている場所もある。弁天は水に関連すると考えられ、実際、七弁天の多くは湧水点に立地している。こうした伝承に全面的に信をおくわけにはいかないが、いずれにせよ、そうした湧水点を基盤として、山麓の山根・真家集落付近から集落が形成されたと推察される。

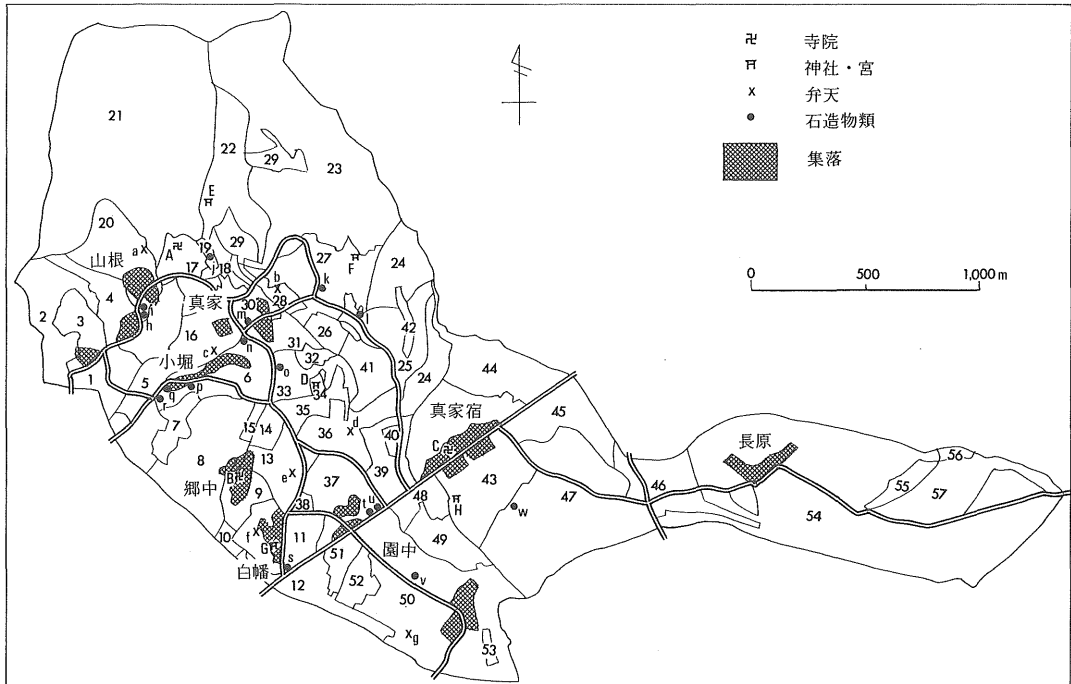
真家地区に残る石造物で年号の判明するもののうち、もっとも古いのは1560年（永禄3）の板碑（第2図のi・1）である。なかでも板碑1には真家因幡守・同木工尉・同新一といった合計7名の造立者の名前がみられる。ここにみられる真家氏は中世に周辺一帯を支配していた在地領主であり、小田氏の支族宍戸氏の一族であった。1383年（永徳3）や1417年（応永24）、1420年（同27）の真家氏文書が『常陸志料』に収められており、その後真家氏は真家地区に根を下ろして⁵⁾、この板碑の造立者となったのである。現在、真家地区には真家氏の本家とされる家が2戸あり、いずれも弁天を近くにもつ。そしてそのうちの1戸は、中世の館を示す地名として知られる字堀ノ内に位置している。さらに、字堀ノ内に隣接する春日神社（第2図のD）は1348年（正平3）に宍戸氏の手で創建され、字鐘ころばしには真家氏の城があったと伝えられている⁶⁾。これらのことから、

真家氏という在地領主による開発もあって、集落が徐々に山麓部から広がってきたことがうかがえる。

中世に真家氏、またその本家にあたる宍戸氏が支配した真家村は、天正年間（1573～92）に佐竹氏の領土に含まれるようになった。佐竹氏の支配下にあった1596年（文禄5）の真家村の石高は542石であった。江戸期に入ると真家村は旗本領となったが、1664年（寛文4）に牛久藩領に編入され、その後幕末まで領主は変わらなかった。元禄年間（1688～1704）に785石余に増えた真家村の石高は、天保年間（1830～44）にはさらに851石余に増加した。この石高増加には、おもに江戸期以降の生産力の上昇や、後述するような新たな開発が関係していた。なお、1843年（天保14）の真家村の家数は39戸であった。

第2図によると、江戸期のとくに中・後期に、多くの石造物類が造立されたことがわかる。なかでも馬頭観音塔は、明治期以降のものも含め6基建てられている。馬頭観音は馬を農耕に用いた時代の名残りであり、中部地方以東では広く農耕の神として信仰されていた。また馬は荷駄を運ぶ駄賃稼ぎの手段としても利用された。真家村は柿岡と岩間の間にあり、両者を結ぶ街道沿いに路村形態の真家宿集落が形成された。もともと字全龍寺にあった全龍寺が、江戸中期に真家宿集落の現在地（第2図のC）に移転したことからも、真家村の中心が徐々にこの街道沿いに移ったことがうかがえる。

一方で、隣村の部原から峠を越えて山根・真家の集落を通り、そこからさらに鐘ころばし山を経由して隠沢観音や愛宕山（いずれも現岩間町内）に至る山側の道も利用された。隠沢観音は安産の神、愛宕山は火防の神として近在の庶民の信仰を集めていた。真家地区に残る道標（第2図のj）にも「東あたごさんみち、西つくばさんみち」と記されており、こうした山道の利用の証拠となっている。こういった交通路での人や物の輸送に、馬が大きく役立っていた。また二十三夜塔は4基みられ、月待（特定の月齢の夜に、集落の人が集まっ



第2図 八郷町真家地区に現存する寺社・石造物の位置

(1993年5月の現地調査により作成)

字名

1 木崎	2 岩婦	3 狭間	4 成沢	5 又苺	6 小堀
7 谷発句	8 松軒	9 西ノ内	10 戸崎	11 白幡	12 樋川
13 大地	14 今宮	15 堂上	16 松原	17 大沢	18 小山下
19 小山	20 地井房	21 深道	22 木挽峰	23 全龍寺	24 鐘ころばし
25 鹿島山	26 八反田	27 石畑	28 菜洗戸	29 菖蒲沢	30 安場
31 新地	32 宮脇	33 宮後	34 宮	35 宮前	36 堀ノ内
37 桑ノ内	38 三本松	39 油天	40 鹿島下	41 北ノ内	42 猪発句
43 宿	44 堺	45 鶴指	46 神影	47 駒庭	48 石橋
49 棒田	50 千本	51 宿原	52 沓掛	53 千本下	54 長原
55 細谷	56 菖蒲田	57 猫松			

寺社・石造物など

A 明円寺 B 福寿院 C 全龍寺 D 春日神社 E 金比羅 F 雷神 G 八幡 H 稻荷
a 地井房弁天 b 全龍寺弁天 c 松原弁天 d 堀ノ内弁天 e 大内弁天 f 白幡弁天 g 千本弁天
h 地藏像・観音経奉納塔 i 板碑(1560年(永禄3)) j 道標(1763年(宝暦13))・十四日念仏供養塔
(1791年(寛政3))・二十三夜塔(1791年(寛政3))・母子観音像 k 馬頭観音塔(1921年(大正10)) l
板碑(1560年(永禄3)) m 馬頭観音塔 n 西国秩父坂東巡礼塔(1690年(元禄3))・六十六部供養塔
(1697年(元禄10))・馬頭観音塔(1871年(明治4))・出羽三山塔(1877年(明治10)) o 馬頭観音塔
(1852年(嘉永5)) p 地藏像 q 観音像 r 馬頭観音塔 s 二十三夜塔(1789年(寛政元))・1801年(享
和元))・聖徳太子塔(1873年(明治6)) t 二十三夜塔 u 祀石塔 v 馬頭観音塔 w 庚申塚(1859年
(明治2))

て忌みごもりを行うこと)の一種である二十三夜講が、真家村で広く行われていたことを物語っている。江戸期の石造物類の造立者をみると、真家村全体の講によるもののほか、山根集落の講によるものが4基あり、山根集落で庶民の多様な信仰がとくに盛んであったと考えられる。

一方、真家地区南東部の千本や長原の集落にはあまり石造物類がみられない。これは、千本集落で「7・8代前の先祖が富山県から移住してきた」と伝えられているように、両集落が江戸後期の浄土真宗門徒の移民によって成立したと関係する。両集落の檀那寺である明円寺(第2図のA)には、同寺を中興した住職夫妻の墓が建っている。夫妻の死去の年は、それぞれ1835年(天保6)と1813年(文化10)と刻まれており、18世紀末から19世紀初頭までの間に真宗移民が行われたことを示唆している。一般に、浄土真宗を信仰する集落では、いわゆる民間信仰が排除される傾向にあったと指摘されている⁷⁾。そうした傾向が真家地区でも、もともとある集落と移民集落との、石造物類の分布密度の差異となってあらわれている。

このようにそれぞれ異なる形成過程をもつ集落が集まって、藩政村としての真家村が成り立っていた。集落による形成時期の違いは、真家地区の明治期以降の展開や、現在の生業・社会組織にもさまざまな形で影響を与えている。

Ⅱ-3 土地利用の変遷

1) 明治期の土地利用

幕末まで牛久藩領であった真家村は、1875年(明治8)に茨城県に編入された。そして1889年(明治22)に、近隣の山崎・柴間・宮ヶ崎・成井の4か村と合併して園部村となった。ここでは、この合併直前の1887年(明治20)に作成された『真家村公図』をもとに、明治期の真家地区の土地利用を復原し(第3図)、その考察を行う⁸⁾。

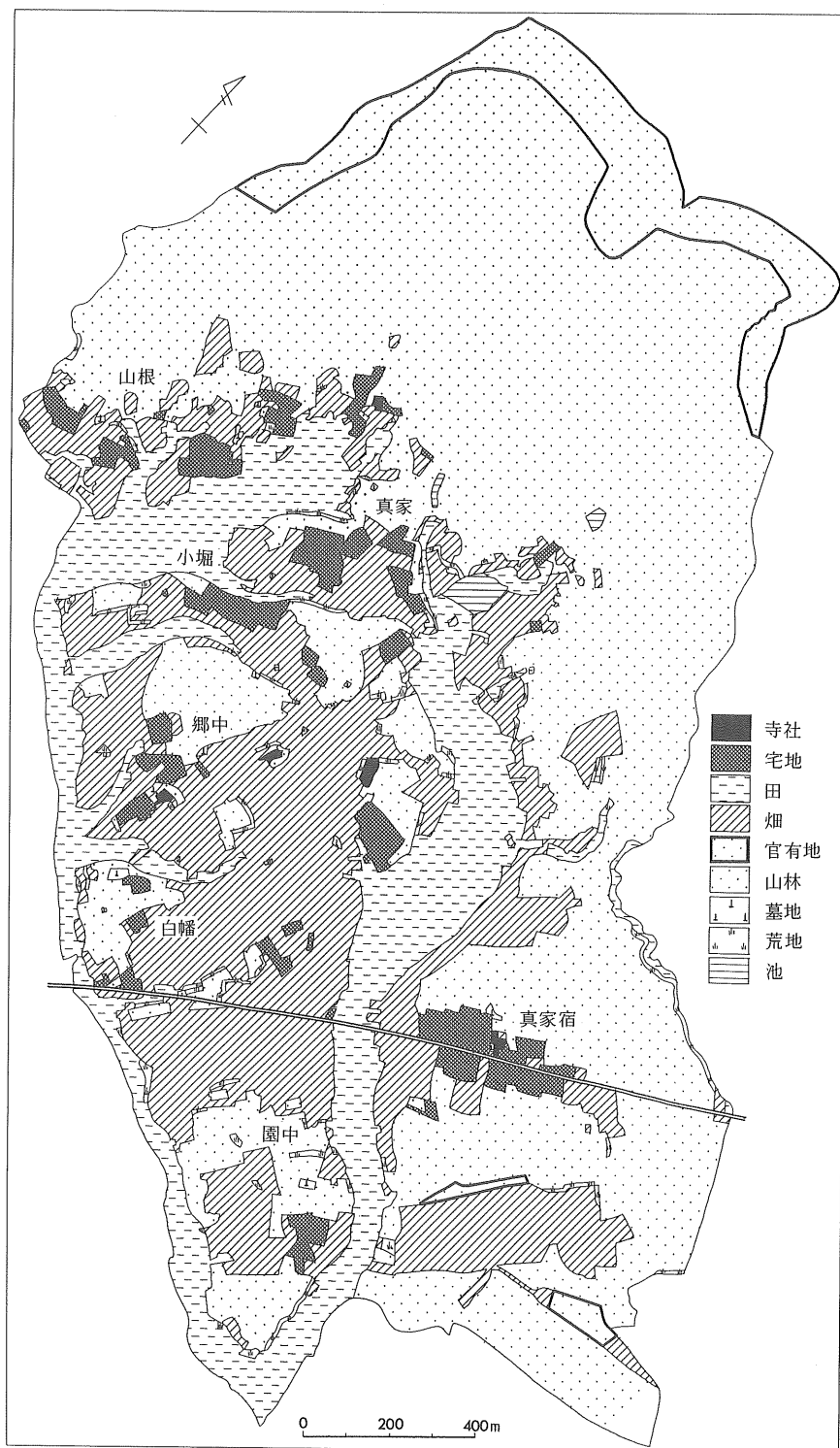
全体的には、地区の北西側一帯に山林が広がり、そこから南東方向にぬける2筋の谷に田が開かれ、谷の周辺が畑や宅地となっている。山に近い山根や真家、小堀などの集落は田と畑の境、つま

り平地と台地の境目という水や耕作に恵まれた位置にあり、このことから、これらの集落が古くから開発された集落であることがうなずける。一方、真家宿や千本などの比較的新しい集落は、台地上にまとまって存在し、ことに真家宿集落は街道沿いの路村であったことがはっきりとわかる。次に、田は、大きな2筋の谷のほかに、そこから枝分かれした小さな谷津にも開かれている様子がよみとれる。北側の谷には3つの灌漑用の溜池があり、北側の谷の田はここを水源としていた。一方、南側の谷の田の水源は、大沢とよばれる沢であった。

畑はおもに山麓の集落周辺部と、2筋の谷に挟まれた台地上に広がっていた。しかし、真家宿集落の北部など、地区全体にわたって平地林がかなり残存しており、肥料や燃料の供給源として利用されていた。逆に真家宿集落の南にあたる字駒庭では、平地林のなかに畑が存在していた。この部分は1本の道路の両側に、規則的な長地条の地割の畑が広がっており、比較的近い時代に平地林の計画的な開墾が行われたことがわかる。また、この開墾地の周辺や、山崎村・瓦谷村・岩間村との境界部の山地には官有林が設定されていた。元来、こうした隣接村との入会山だった部分が、明治期に入って官有林に組み込まれたと考えられる。

そのほか荒地も若干みうけられた。荒地のうち字木崎・千本の2か所には馬捨地があり、江戸期から引き続いて明治期にも、農耕や荷駄運びに馬が盛んに利用されていたことを示している。馬捨地が単なる「捨地」ではなく、信仰の要素も含んだ馬の「墓地」であったことは、明治期以降に馬頭観音塔が造立され続けたことから裏付けられる。さらに、墓地は真家地区全体に散在しており、集落ごと、あるいは家ごとに墓地をもっていた。墓地の散在状態は今日にも引き継がれており、集落ごとのまとまりはあっても、地区全体としてのまとまりは弱い真家地区の性格の一端をのぞかせている。

寺社地は現存する春日神社と明円寺・福寿院・全龍寺のほか、字今宮にみられ、何らかの寺社の



第3図 八郷町真家地区における明治期の土地利用
 (『新治郡真家村公図』(1887年)により作成)

存在を示している。真家村には上の3寺院のほかに、真言宗の常福院があったことが記録されており⁹⁾、字今宮の寺社地はこれに該当する可能性が高い。その周辺に墓地がないこと、また真言宗という宗派を考慮すると、この常福院は修験の寺であると考えられる¹⁰⁾。なお春日神社は、1873年(明治6)に真家・成井両村の鎮守となっており、分社として鹿島・諏訪・八幡・雷・白峰・天神をまつている。これらの分社は、春日神社に統合される以前には村内の各所にあったと考えられ、実際、この公図にはあらわれていない雷神(第2図のF)や八幡(同じくG)の祠が現在も残り、集落や家といった単位で祭祀が行われている。

1887年(明治20)の公図の時点での真家地区の土地利用は、開墾地や官有林などに、明治期に入ってから新しい活動を部分的に反映しているものの、馬捨地や修験寺院の存在に顕著のように、基本的には江戸期の様相をとどめていた。

2) 昭和初期の土地利用

第4図は、1936年(昭和11)の土地宝典から作成した、園部村(当時)真家地区の土地利用図である。明治期の公図をもとにした第3図とはおよそ半世紀の開きがあり、その間の土地利用の変遷をうかがうことができる。

まず宅地についてみると、明治期より増加するとともに、その分布がより分散した。この傾向はとくに南東部で著しかった。たとえば千本集落では、宅地が3区画から7区画に増えた。真家宿集落でも道路沿いに宅地が散らばる傾向がみられ、同様の傾向は道路沿いの宅地が出現した桑ノ内集落にも認められた。一方、山麓の古くからの集落では、さほど宅地は増えていない。つまり、宅地の増加は主に、相対的に新しい集落で起こっていることがわかる。江戸後期からの新集落形成の流れが、明治・大正期に入ってから継続していたことになる。真家地区だけの戸数や人口を示す統計はないので、園部村全体の戸数、人口を示すと、1887年(明治20)の320戸、2,077人から、1935年(昭和10)には631戸、3,429人となっており、とくに戸数の伸びが著しかった。

当時真家地区の世帯のほとんどは農家であり¹¹⁾、こうした戸数や人口の増加は、農業の生産力の拡大によるところが大きかった。これと関連して目立つのは、畑の増加である。とくに真家宿集落の北部では、林地がブロック状の地割をもつ畑に開墾されており、ほかにも山根・千本集落の周辺で畑が開かれた。田の面積が明治期とほとんど変わらなかったことから、明治期から昭和初期にかけての真家地区では、畑作物を中心に生産力が拡大したと考えられる。1929年(昭和4)の園部村では、田の240町歩に対して畑が599町歩あり、畑のうち167町歩は桑畑であった¹²⁾。ただし、平地林が畑へ開墾される一方で、明治期の公図にあった真家宿集落南部の開墾地が一部を除いて林地に戻る、といった現象もみられ、条件の悪い畑が放棄されて、よりよい条件の畑での生産に力が向けられていったことが推察される。

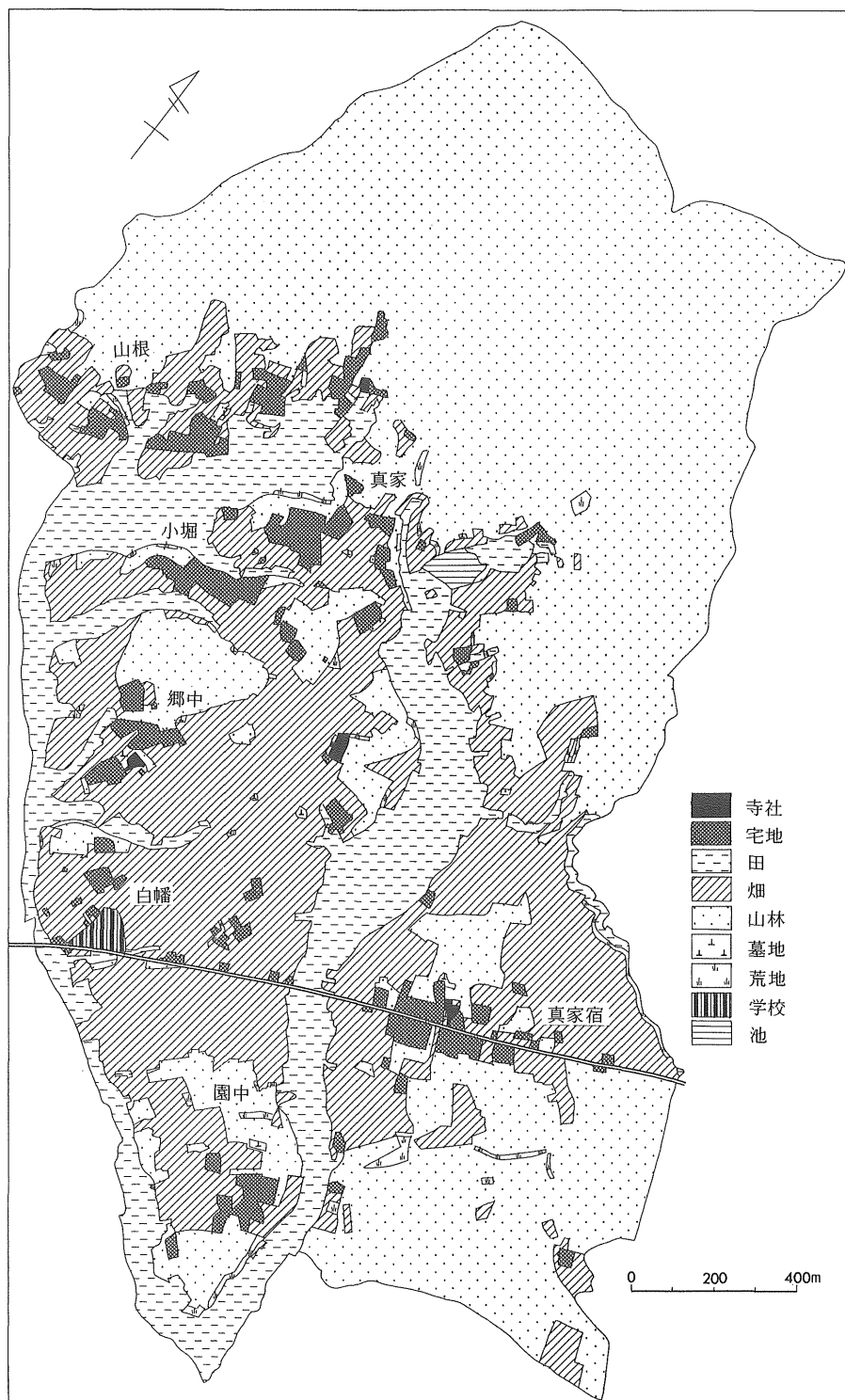
明治期にみられた官有地や馬捨地はなくなっている。このうち馬捨地の消滅は、馬の重要性が低下したことに対応していると考えられる。馬頭観音塔も1921年(大正10)のもの(第2図のk)を最後に造立されなくなっており、馬に関する信仰も薄れていった様子がよみとれる。このほか3か所あった溜池が、最大の全龍寺池を除いて荒地となったこと、字白幡に真家小学校(現在は役場の出張所および公民館)が開設されたことが、おもな変化といえる。このように、明治期から昭和初期にかけての真家地区の土地利用の変遷は、畑の拡大とそれに支えられた宅地の増加、その一方で林地の減少という点によって特徴づけられる。

なお、園部村は1955年(昭和30)に、周辺町村と合併して八郷町の一部となった。

3) 1960年以降の土地利用の変遷

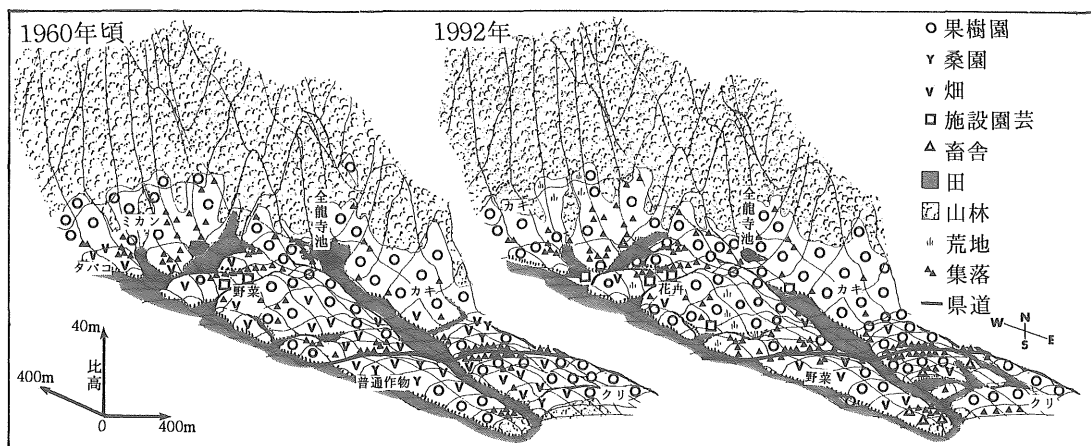
真家地区では、前述のような多様な自然的基盤を反映し、古くから集落ごとに特徴的な土地利用がみられた。真家地区における1960年頃の土地利用と現在の土地利用を模式的に示したのが第5図である。

茨城県南西部と同様に、真家地区でも伝統的な土地利用は水田と麦類、甘藷、陸稲、落花生など



第4図 八郷町真家地区における昭和初期の土地利用

(『新治郡園部村土地宝典』(1936年)により作成)



第5図 八郷町真家地区における土地利用の変遷

(現地調査, 聞き取りにより作成)

の栽培される畑, 桑園から成り立っていた¹³⁾。しかし, 真家地区のうち, 気温の逆転現象により, 冬季でも温暖な山麓部や丘陵部では, 果樹栽培あるいは施設園芸が早くから取り入れられていた。とくに, ミカン栽培の歴史は古く, 古生層の山地中腹では, 江戸期からフクレミカンが作られていた¹⁴⁾。

1960年頃, 真家地区の山地中腹や山麓部ではミカン¹⁵⁾やカキの栽培がみられた¹⁶⁾。これらの果樹の分布には, 土壤条件の差異が反映され, ミカン栽培は山根集落の山地中腹で, カキは真家集落で栽培されていた¹⁷⁾。また, わずかながら逆転層の影響を受ける小堀集落や郷中集落でもカキ園がみられた。しかし, 冬季に著しく低温となる台地部では, これらの果樹栽培はみられなかった¹⁸⁾。

また, 施設園芸は, 小堀集落を中心とする丘陵部で行われていた¹⁹⁾。この頃, 施設で作られていた作物はキュウリやトマトであった。当時の施設は1mほどの穴を掘って, 上にガラス障子をかぶせたものであった。そのため, 深く穴を掘れる土地であることが栽培条件の1つであった。小堀集落には, 地下数10cmから1m付近に, アワツチと呼ばれる柔らかい土壌があり, 穴を深く掘ることが可能であった²⁰⁾。

一方, 台地部では, ミカンやカキといった果樹はみられなかったが, クリの栽培が行われていた。明治期に現在の千代田町で始まったクリ栽培は, 1960年頃には周辺の市町村にも拡大し, 真家地区でも盛んになっていた²¹⁾。クリ栽培は表土の深いところに適し, 山麓部や丘陵部よりも台地部で盛んであった。平地林を開墾したクリ園が真家宿集落や千本集落でみられ, とくに, もともと平地林の多かった真家宿集落では広大な面積を占めていた。

また, 1960年頃, 養蚕が現金収入源の1つであり, 真家宿集落周辺や, 桑ノ内集落から千本集落にかけての台地部には, 桑園が多くみられた。しかし, 桑の成育の悪かった山麓部では, 明治・大正期からすでに衰退する傾向にあった。

畑作としてはタバコ栽培が行われていた。タバコは地力の高い山麓部の土壌に適し, 山根集落で多く栽培されていた。しかし, 地力の低い軽鬆な火山灰土壌の広がる千本集落では, タバコ栽培はほとんどみられなかった。一方, 麦類, 陸稲, 落花生, 甘藷のような普通作物は, やや地力の低い, 桑ノ内集落から千本集落にかけての台地部で多くみられた。また, 山麓部や丘陵部の集落でも, これらの作物が果樹園で間作されていた。

以上のように1960年頃の真家地区では, 山麓部

や丘陵部ではカキ、ミカンなどの果樹園や野菜の施設園芸がみられた。一方、台地部では平地林を開墾したクリ園のほか、桑園、普通作物といった伝統的な土地利用がまだ多く残っていた。

1960年以降、それまで、真家集落を中心にみられたカキ園が真家地区全体に拡大した。また、小堀集落では、野菜だけでなく、花卉の施設もみられるようになった。さらに、普通作物と桑園から成る伝統的な土地利用がみられた台地部でも、露地野菜、カキ園に変化し、養豚用の畜舎もみられるようになった。

4) 現在の土地利用

1992年5月に行った土地利用調査（添付地図参照）からまず気づくことは、いずれの集落でも果樹園が最も広い面積を占めていることである。果樹園と普通畑の割合を比較すると山麓部と丘陵部では果樹園の割合がきわめて高く、台地部では畑の割合が比較的高い。しかし、麦類、陸稲は現在ではほとんど栽培されていない。そのほか、丘陵部の一部で、施設園芸がとくに多いことも土地利用の特徴としてあげられる。

真家地区ではカキが最も卓越する作物であるが、気温の違いからその分布には偏りがある。カキ園は、真家集落の山麓部と丘陵部で多く、さらに圃場整備の行われた水田の一部もカキ園に転換されている。ただし、低地部のカキ園では降霜の危険があるため、防霜ファンが設けられている。一方、山麓から離れた集落では、カキよりもクリが多くみられる。とくに、真家宿集落では、ほとんどすべての果樹園がクリによって占められている。また、桑ノ内集落から千本集落にかけてはギンナンや植木なども多くみられる。

その他にも真家地区では、様々な果樹がみられる。例えば、丘陵部ではカキ以外にプラムやモモが栽培されている。また、調査地域の南縁にあたる台地部では、ナシやブドウの栽培がわずかにみられる。ナシやブドウは調査地域よりも南側で栽培が盛んであり、土壌条件の関係で千本集落や真家宿集落が栽培の北限にあたる。一方、山根集落の山地中腹には、ミカン園がみられる。ただし、

全体的には植林や荒地化が進んでいる。

施設園芸は、小堀集落付近にとくに集中している。チューリップやキク、ユリなどの花卉栽培が中心であり、露地でもシャクヤクが栽培されている。また、低地部の園芸団地では、花卉だけでなく、キュウリも栽培されている。

畑作物についてみると、桑ノ内集落や千本集落、真家宿集落では野菜類や豆類が多くみられる。野菜を作っている畑では、トウモロコシ、チンゲンサイ、枝豆、エンドウなど、様々な種類のものが栽培されている。また、千本集落では、ウドやミツバの栽培もみられる。

水田についてみると、カキや花卉などを農業経営の中心としている集落では、休耕田が多い。小堀集落から白幡集落にかけての水田は、圃場整備の行われていない狭小な谷地田であり、そこには休耕田が多くみられる。聞き取り調査によれば水稲よりもカキの収益があがること、カキの収穫時期と稲刈の時期が競合することから、水稲栽培を委託している場合が多い。しかし未整備の狭い谷地田では、委託されることも困難で、耕作放棄されることが多い。一方、省力的なクリ栽培中心の真家宿集落では、休耕田はほとんどない。また、陸田もみられ、むしろ以前よりも水稲の作付面積は拡大している。

Ⅱ-4 集落景観

1) 家屋

伝統的な主屋の間取りの例として、N農家の改築前の状況を(第6図)、現在の間取りの例として、N農家、K農家、T農家の状況を示す(第7図)。これによると現在の間取りには明らかに伝統的な間取りが踏襲されていることが分かる。主屋は土間部と居住部とに分かれ、向かって右側を土間としている。居住部は整型田の字型を基本としている。

かつて、カマドのあった土間は、炊事場として機能していた。また、N農家の土間は広く、秋の収穫期には農作業の場として使われた。さらに、土間の隅には内厩も設けられていた。現在では、

K 農家、T 農家ではカマドに代わって流し台、ガス台を設置しており、炊事場としての機能は受けつがれている。なお、1980年代末に改築したばかりのN 農家では、新たに独立した台所が造られている。そのほか、現在では、土間にテーブルが置かれ、身近な客を接待するのに利用されている。

居住部には伝統的に田の字型に区画された4つの部屋と土間側に突き出たチャノマから構成されている。チャノマには囲炉裏が掘られていた。チャノマは家族の団らんの場として使われ、現在も同じ機能を持つ。チャノマ以外の4つの部屋のうち、一般的に手前の2部屋は「ヒロマ」、「トコノマ」などと呼ばれ、冠婚葬祭、寄り合いなどの際に利用されている。一方、奥の2部屋は「ヘヤ」、「オクザシキ」などと呼ばれ、寝室に利用されている。このうち、最も奥の左側にある寝室は、お産の部屋とも呼ばれている。ただし、こ

の部屋の下に「不動の水」と呼ばれる沢水の流れるN 農家では、不動様がけがれないようにと、手前の左側の部屋をお産の部屋としていた。

仏壇や神棚については、仏壇をチャノマに置き、神棚を手前の右側の部屋に置くのが一般的である。ただし、浄土真宗のT 農家では、手前の左側の部屋に仏壇を置き、「仏サンの部屋」として他の部屋とは区別している。

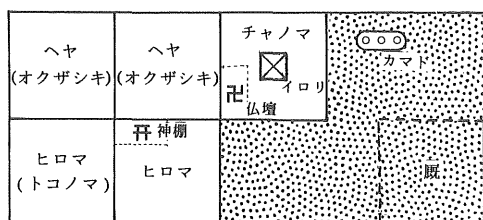
山麓部に位置する家屋の間取りには地形の制約を受け、他の場所にみられる間取りと異なる場合がある。例えば、K 農家やT 農家では、便所が左側に配置されるが、山麓部のN 農家では山地がせまるため、右側に配置されている。

真家地区の家屋は、杉本（1969）による「南関東型」に区分され、基本的には寄せ棟、平入りの直屋である²²⁾。ただし、屋根型は入母屋としている場合も多い（写真2）。屋根はいずれも瓦葺きで、化粧づくりを施してある。また、各家とも基本的に平屋であるが、T 農家では、増築部だけが2階建てとなっている。

2) 宅地

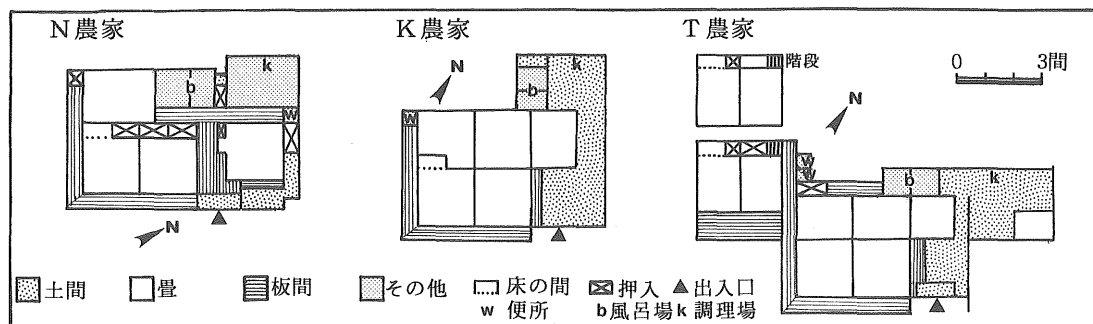
敷地内の建物配置を示したのが第8図である。建物についてみると、主屋、クラ、マテヤ²³⁾（マデヤともいう）の基本的な構成に、隠居、ミソゴヤ、キゴヤ、車庫、畜舎などが加えられる。

クラについてみると、K 農家、T 農家では切妻平入りで、漆喰が使われている。ただし、大壁式



第6図 八郷町真家地区における農家の伝統的間取り

（聞き取り調査により作成）



第7図 八郷町真家地区における事例農家の間取(1993年)

（現地調査により作成）



写真2 八郷町真家地区における農家の主屋
(1993年5月撮影)

ではなく、柱の間に漆喰で塗り固めていたものであり、腰部には、大谷石や板が張られている²⁴⁾。また、N農家のクラはカヤ葺き屋根で、壁も板で造られている。3つの事例とも、クラの周囲には火災に強いモチノキが植えられている。また、マテヤもクラと同様、切妻平入りである。マテヤは農作業、一時的な収穫物の保管、農具の収納に利用される。

クラやマテヤに比べて、キゴヤは粗末な造りの小屋で、元来薪や竹などを保管しておくのに使っていた。現在では倉庫の代わりとなっていることが多い。

車庫についてみると、N農家の場合は、マテヤの横に屋根を取り付けただけの簡単なものである。一方、K農家では車庫の2階を、若い世代の部屋としている。

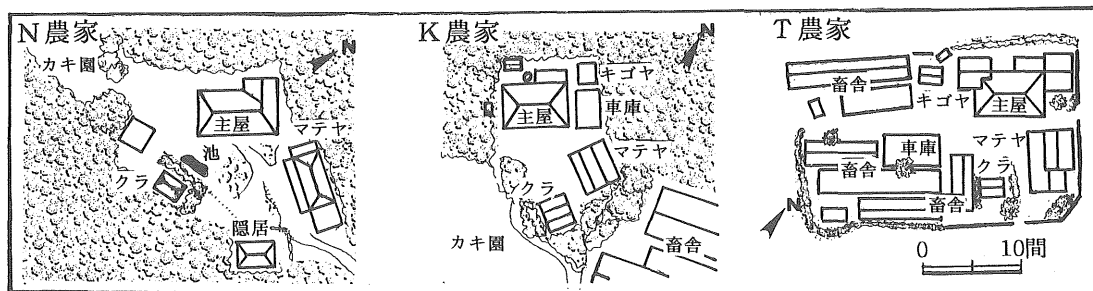
建物配置についてみると、主屋、マテヤ、クラが敷地内の三方に、正方形あるいは長方形の線上に配置される。ただし、山麓部や平坦面の少ない丘陵部では地形に制約され、建物の配置が多少ずれている。また、山麓部の集落では山地から出る石で石垣を組むことによって、平坦な土地を少しでも多く確保している。

3) 集落景観—小堀集落を中心に—

真家地区では、集落の形態も多様である。山根集落や真家集落は、山麓や丘陵上のわずかな平坦地に立地し、半散村的な集落形態を示す。また、小堀集落や真家集落の西部では、東西にのびる狭い丘陵上に家屋が並び、列村をなしている。郷中集落では小規模な谷の谷頭部に家屋が集まっている。ただし、数本に分岐する谷を避けて、疎塊村的に家屋が位置する。白幡集落、桑ノ内集落、千本集落では家屋数は多くないが1か所に集まり、塊村となっている。真家宿集落では主要道路の両側に家屋が並び、路村の形態を示す。

ここでは、小堀集落を取り上げて集落景観を説明する(第9図)。小堀集落は、周囲を谷底平野によって囲まれた、やや幅の狭い丘陵上に家屋が並んでいる。家屋の列の北側には林地が残されている。

主屋についてみると、平屋の寄せ棟や入母屋瓦屋根の化粧づくりが多く、すべてが平入りである。2階建ての入母屋化粧づくりの家は1戸と少ない。それぞれの家は主屋、マテヤ、クラから構成され、隠居、キゴヤ、車庫などもみられる。また、



第8図 八郷町真家地区における事例農家の建物配置(1993年)

(現地調査により作成)

本家筋と言われている家は一般的に大きな門構えで、長屋門をもつ場合もある。そのほか、現在使われていないタバコの乾燥室や畜舎が残っている。小堀集落では現在花卉栽培を農業経営の中心としている農家が多く、そのような農家には球根保存用の冷蔵庫が多くみられる。

各家の敷地の北側の隅には屋敷神が奉られ、そのような場所には、モチノキや樺の大きな木がよくみられる。

集落共有のものとして、前節で述べられたように過去の民間信仰のなかで重要な役割を果たした祠、馬頭観世音や地藏像がみられる。また、「膳碗入れ」と呼ばれる小屋も集落で共有され、現在も使われている。

Ⅲ 経済活動の変遷と実態

Ⅲ－１ 経済活動の変遷

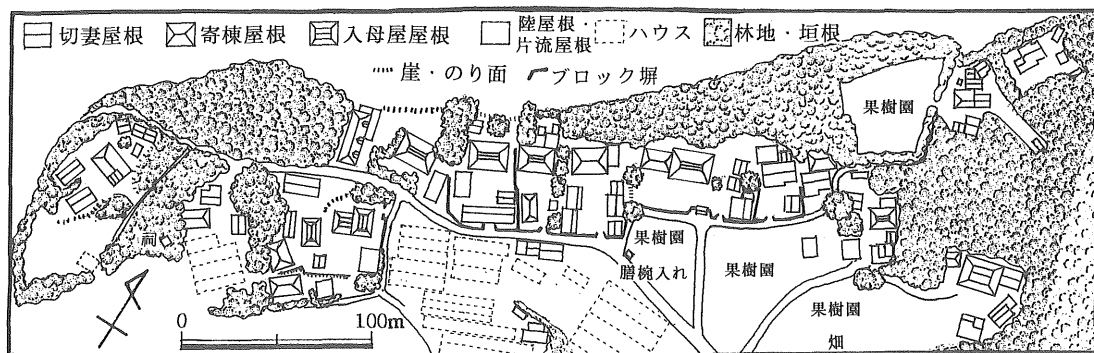
真家地区においても、第二次世界大戦以前は養蚕が盛んに行われ、主要な現金収入源となっていた。しかしながら、1927年（昭和2）頃からの不況により繭価が暴落し、養蚕農家は経済的に著しい打撃を受けたため、養豚、養鶏、果樹栽培などを取り入れるものが増加した²⁵⁾。カキ栽培の導入はそのような動きのひとつであったといえる。

それ以前からこの地域には在来種のカキが存在し、よく果実が実っていた。そこで、1935年（昭和10）頃に岐阜県より富有の苗木を導入し、カキ

の商業的栽培が始められた。『八郷町誌』にも、当時、8名の共同事業をもって1.4haを造成し、さらに各個人が20aずつ植栽したとされている²⁶⁾。これが、真家地区におけるカキ栽培の始まりであるといえよう。

また、真家地区では、温床を用いたキュウリの促成栽培も行われていた。これは、1900年（明治33）、当時園部村農会長であった真家信太郎氏が千葉県安房郡においてその方法を視察し、翌年、村内の篤志家とともに試作を始めたものである²⁷⁾。圃場に東西2間、南北4尺、深さ2尺5寸の穴を掘り、その中に山林から採取してきた落葉などの醸熟物を入れ、その上に堆肥をのせて、さらに15cmほどの厚さに土壌をかぶせた温床でキュウリを栽培した。穴の上はガラス障子で覆い、保温を図った。1戸当たり20床前後の規模で作付した。11月中旬に苗床に播種され、1月中旬から2月中旬にかけて定植されたキュウリは、2月中旬から6月下旬にかけて収穫された。収穫されたキュウリは東京市場に出荷された。

第二次世界大戦中およびその直後は、食糧増産の必要から、畑では、大麦、小麦、サツマイモ、ラッカセイ²⁸⁾、陸稲などが作付された。また、桑園の普通畑への転換もいっそう進んだ。また、タバコが1943年（昭和18）頃から1955年頃にかけて山根集落や小堀集落を中心に栽培された。これも、多くは桑園からの転換であった。



第9図 八郷町小堀集落の景観(1993年)

(現地調査および1991年国土地理院撮影航空写真により作成)

第二次世界大戦後は、戦争中に中断されていた促成キュウリの栽培が復活したほか、モモをはじめとする果樹の栽培や野菜類の生産が試みられるなど、さまざまな商業的農業が模索された。

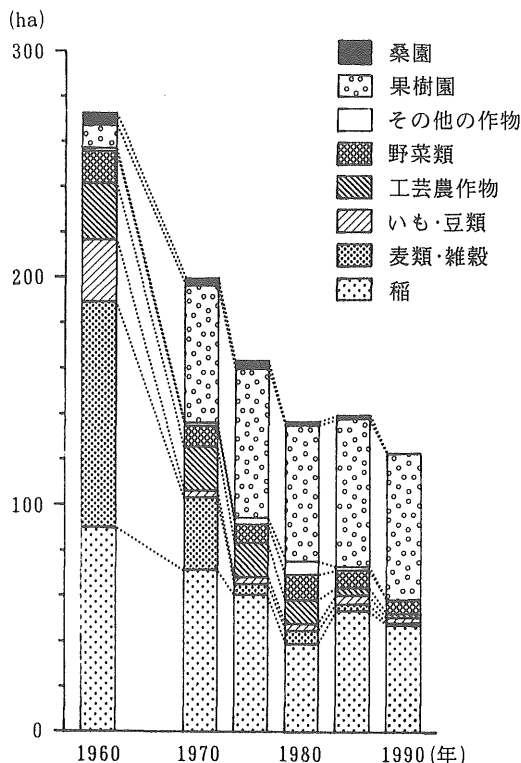
促成キュウリは第二次世界大戦前と同様の温床を用いて生産されたもので、当時、真家、小堀、山根、白幡の各集落の13戸のキュウリ生産農家で出荷組合を組織し、東京の神田、千住、築地市場に出荷した。しかしながら、1955年頃になると、促成キュウリが売れなくなったため、露地トマトの生産に取り組み始めた。収穫したトマトは東北から北海道に出荷した。

また、1955年頃には、近隣のモモの生産者で出荷組合を結成した。モモ園には、これまで普通作物を作付していた畑が転換された。当時、モモは東京や水戸に出荷された。また、この出荷組合は、山梨県から導入したプラムの栽培にも取り組んだ。しかしながら、プラムは豊凶の差が著しく、栽培は短期間で中止された。

1950年には花卉栽培が始められた。この年、真家幸雄氏がフリージアの栽培を、翌1951年からはチューリップの栽培を始めた。当初は、促成キュウリの温床を利用した。生産者については若干の変化もあったが、現在では6戸が花卉の生産を行っている。バラやキク、ユリなどの生産も行われてきたが、チューリップを主体として発展してきた。

1960年頃からは、それまで大麦や小麦などを作付していた畑からカキ園への転換が進み、カキの栽培が盛んになった。農業センサスによると、麦・雑穀が1960年の99haから1970年には32haに減少する一方、同じ期間に果樹園は10haから60haに増加している（第10図）。新しく植栽されたカキの樹間には野菜類が作付された。加工キュウリや加工トマトはこのようにして栽培されたもので、契約栽培の形態をとった。当時、真家、小堀、山根の3集落で約20戸の農家が加工キュウリを栽培し、一次加工は共同作業で行った。

また、1960年頃から養豚を行う農家が増えてきた。当初は、堆肥を得ることを主要な目的として



第10図 八郷町真家地区における作物類別収獲および果樹園面積の推移
(農業センサスより作成)

おり、母豚を2～3頭飼養する程度の小規模なものであった。養豚は、特に千本集落で盛んになり、農家数、頭数ともに他の集落より多かった。1965年頃後半には最盛期をむかえ、飼養規模も母豚5～10頭に拡大し、仔猪生産や一貫生産を行うようになった。しかし、その後、価格の低迷から養豚を行う農家は減少した。

その他の畜産では、1980年頃から、経済連を通じて大手食品会社との契約に基づくプロイラーの飼養が行われるようになった。

1960年頃から、カキ栽培を農業経営の中心とした自立経営農家が成立したが（写真3）、さらに1978～79年には水田利用再編対策にともなう転作により、水田へのカキの植栽が進んだ。補助事業によって、選果場の建設、防霜ファンの設置もなされた。このようにして水田に植栽されたカキの



写真 3 八郷町真家地区におけるカキの摘果作業
(1993年 5 月撮影)

9 割は西村早生であった。

真家地区のカキ生産者は、個人出荷を行っている数戸を除いて、真家、小堀、山根の各集落の生産者を中心に約20名からなる丸園柿組合を組織している。丸園柿組合は出荷する市場によって、さらに3つのグループに分かれている。通称東京グループは東京千住市場を中心に柏市場にも出荷している。柏グループは3名の生産者からなり、現在は千葉市場に出荷している。以上の2グループは市場との販売の交渉および代金の精算を八郷町農業協同組合に任せている。これら2グループは市場では丸園柿組合という名称を使用しているが、残る1グループは丸真柿組合と称し、通称日立グループと呼ばれている。このグループは日立市場および土浦市場に出荷しており、農家が個人で選果・梱包したカキを真家集落内の集荷所に搬入すると、市場の荷受会社がこれを受け取りに来る。

1979年には、当時キュウリを栽培していた農家3戸と花卉栽培農家4戸で農事組合法人八郷園芸団地組合を結成し、転作促進対策特別事業の認定を受け、小堀集落の西側の水田に園芸団地を建設した。これは17,600m²の敷地に両屋根型の温室10棟を設置したものである。温室は1棟の面積が1,000～2,000m²である。総工費1億5千万円のうち50%が国の補助であり、残る50%は個人負担であった。その資金には近代化資金を利用した。

経営規模別にみると、1,000m²と1,320m²がそれぞれ1戸ずつで、残りの5戸は2,000m²であった。

施設を利用してキュウリを生産している農家の中には、八郷町農業協同組合を通して生協にも出荷している農家も存在する。八郷農協の生協に対する野菜の供給は1985年のシタケの供給から始まったもので、その後品目も拡大し、現在は20品目以上を供給している²⁹⁾。ただし、真家地区で生協出荷を実施している農家はキュウリの生産農家に限られている。

Ⅲ－2 農業経営の実態

1) 真家地区における農業の性格

ここでは1990年農林業センサス集落カードのデータを基に、真家地区がいかなる農業的性格を有しているかを把握する。なお、真家地区は、農林業センサスにおいては山根、真家（小堀集落を含む）、郷中（白幡集落を含む）、園中（桑ノ内および千本集落を含む）、真家宿の5つの調査区に分かれている。

第1表によると、1990年における真家地区全体の農家数は127戸である。農家率は65.5%であり、旧園部村や八郷町の平均値に比較して高い値となっている。農林業センサスの調査区別に農家数をみると、山根が25戸、真家が31戸、郷中が18戸、園中が24戸、真家宿が29戸である。山根と真家では農家率が70%以上と高く、郷中と真家宿では50%台と低くなっている。また、専業別にみると、真家地区では専業農家が20戸、第一種兼業農家が31戸、第二種兼業農家が76戸となっており、兼業化が顕著である。しかし、真家では全体の4分の3が専業農家もしくは第一種兼業農家である。他の調査区では第二種兼業農家が大半であることを考えると、この調査区における農業への依存度は依然として高いことがうかがえる。

次に経営耕地についてみると、真家地区全体での経営耕地面積は12,849aで、このうち田が4,628a、畑が1,793a、樹園地が6,428aとなっている。それぞれの総経営耕地面積に占める割合は、36.0%、14.0%、50.0%である。ちなみに八郷町

第1表 八郷町真家地区における農家数および経営耕地面積(1990年)

	世帯数 (戸)	農 家 数 (戸)				経営耕地面積 (a)				平均経営 耕地面積(a)
		総計	専業	第一種兼業	第二種兼業	総計	田	畑	樹園地	
山 根	34	25	2	3	20	1,945	877	397	671	77.8
真 家	41	31	9	15	7	3,922	715	125	3,082	126.5
郷 中	33	18	4	0	14	1,334	472	430	432	74.1
園 中	37	24	1	6	17	2,279	1,011	531	737	95.0
真 家 宿	49	29	4	7	18	3,369	1,553	310	1,506	116.2
真 家 地 区	194	127	20	31	76	12,849	4,628	1,793	6,428	101.2
旧 園 部 村	1,221	617	78	154	385	74,277	23,514	19,021	31,742	120.4
八 郷 町	6,664	3,886	407	586	2,893	373,987	186,217	105,190	82,580	96.2

(1990年国勢調査および1990年農林業センサス集落カードより作成)

と旧園部村の樹園地率はそれぞれ22.1%, 42.7%であり, 真家地区の樹園地率の高さがわかる。また, 真家地区における1戸当たりの平均経営耕地面積は101.2aになるが, この値は八郷町の平均より広く, 旧園部村の平均に比べて狭い。調査区別にみると, 山根では経営耕地面積が1,945aで, うち45.1%を田が占め, 次いで樹園地, 畑の順となっている。1戸当たりの平均経営耕地面積は77.8aであり, 規模は小さい。真家では経営耕地3,922aのうち78.6%が樹園地となっており, 田, 畑はわずかである。また, 平均経営耕地面積は真家地区のなかで最高の126.5aである。郷中では1,334aの経営耕地を田, 畑, 樹園地がほぼ3分している。また, 平均経営耕地面積は, 地区内最低の74.1aである。園中の経営耕地面積は2,279aであり, 山根と同様に田, 樹園地, 畑の順で配分されている。なお, 平均経営耕地面積はやや狭い95.0aとなっている。真家宿では, 田と樹園地で経営耕地の3,369aをほぼ2分しており, 畑の割合は極めて低い。また, 平均経営耕地面積は真家に次いで広い116.2aである。

さらに, 第2表で作物別の収穫面積および栽培面積についてみていくことにする。真家地区における稲の収穫面積は1戸当たり約37aにしかならず, 最も高い値を示す真家宿でさえ60aに満たない。全農家が稲作を行っているわけではないが, この数字をみる限り, 真家地区においては米は商品作物としてあまり重要であるとはいえない。畑作物についてみると, 野菜類の収穫面積が最も大

きく, 特に園中と真家宿の数字は八郷町や旧園部村と比べても顕著である。しかし, 全体に畑地の利用率は低い傾向にあり, 集約的な利用は行われていない。果樹栽培についてみると, 真家地区ではカキとクリがそのほとんどを占めていることがわかる。特にカキに関しては, 真家地区はその栽培面積で八郷町の38.5%, 旧園部村の57.9%に相当し, 主要な産地となっている。ただし, 調査区単位では山根と真家でカキが, 真家宿でクリが卓越しているという差異がみられる。

これ以外では, 養豚や養鶏といった畜産を営んでいる農家が10戸ある。また, 花卉やキュウリなどの施設園芸を行っている農家が真家と郷中に11戸存在し, それらの施設面積は合計すると181aになる。

以上みてきたように真家地区の農業は, このような狭い地域内においても経営規模や地目構成, 作物において調査区の間で差異が存在した。しかし, 全体として比較的農家率も高く, 真家を除けば兼業化が顕著である。また, 作物については, カキ, クリといった果樹が卓越しており, 米や畑作物はあまり重要ではない。さらに, 施設園芸や畜産, 露地野菜作といった収益性の高い, 労働集約的な農業が一部で行われていることも注目される。

2) 農業経営の諸類型

真家地区の農業経営を検討するために, 販売を目的として農業を営んでいる農家を主要な経営部門から類型化した。なお, 真家地区の127戸の農

第2表 八郷町真家地区における作物別収穫面積および栽培面積(1990年)

	収穫面積 (a)						栽培面積 (a)			
	総計	稲	麦・雑穀 いも・豆	野菜	工芸作物	左記以外 の畑作物	総計	カキ	クリ	左記以外 の果樹
山根	1,148	832	24	61	181	0	670	585	55	30
真家	798	705	41	52	0	50	3,082	2,595	402	85
郷中	588	468	90	30	0	0	432	245	187	0
園中	1,439	1,016	100	323	0	0	737	440	282	15
真家宿	1,830	1,659	71	100	0	0	1,436	28	1,371	37
真家地区	5,803	4,680	326	566	181	50	6,357	3,893	2,297	167
旧園部村	39,850	25,666	5,496	3,174	3,453	2,061	28,218	6,718	15,985	5,515
八郷町	265,588	180,699	41,095	15,700	14,502	13,592	69,512	10,109	37,135	22,268

(1990年農林業センサス集落カードより作成)

家のうち農産物を販売しているのは、117戸である。この117戸は主な農業収入源となる経営部門から「施設園芸農家」、「露地野菜作農家」、「カキ栽培農家」、「畜産農家」、「稲作農家」、「クリ栽培農家」、「その他の農家」という7つの農業経営類型に分けられた。以下では、第3表と第4表をもとに「その他の農家」を除く6つのタイプの農業経営をみていくとともに、各類型の分布状況についても検討する(第11図)。

「施設園芸農家」の類型には11戸が該当し、専業農家が6戸、第一種兼業農家が5戸となっている。このうち7戸は、八郷園芸団地組合の構成員である。この類型には農産物販売金額の大きい農家が多く、年間1,000万円以上のものも7戸ある。経営規模をみると、1.0～2.0haが中心であり、平均でも全類型の中で最も広い154.3aである。施設面積は最低で700m²、最高で4,000m²という規模になっている。作付品目別にみると、6戸が切花、3戸がキュウリ、2戸がその他の作物をつくっている。これらの農家の大半は施設園芸のみで農業所得を得ているが、3戸の農家がカキを1ha以上栽培して複合経営を行っている。また、稲作をしている農家は6戸あるが、収穫面積はいずれも60a以下であり、重要度は低い。このタイプの農家は、真家、小堀、郷中、白幡の各集落にみられる。特に小堀集落の一角にまとまって分布している農家は、将来の農業経営に対する独自の先端的な考えから共同で園芸団地をつくって、自立

的な施設園芸農業をめざしている。

「露地野菜作農家」は6戸あるが、うち専業農家が1戸、第一種兼業農家が3戸、第二種兼業農家が1戸である。これらの農家の販売金額は、200～1,000万円に集中している。経営規模をみると、2.0ha以上が1戸、1.0～2.0haが3戸であり、平均は125.5aである。また、耕地のうち畑が半分を占めており、樹園地は少ない。畑では、キュウリ、キャベツ、大根などの野菜を栽培している。他の経営部門との組み合わせでは、養豚を行っている農家が1戸あり、この類型の中で最高の販売額をあげている。ほかに米、カキ、クリの作付も若干みられるが、規模は小さく、商品作物としての価値は低い。このタイプの6戸の農家のうち4戸は、南部の桑ノ内集落や千本集落、真家宿集落に分布している。また、残りの2戸は山根集落にみられる。

「カキ栽培農家」に分類された農家は32戸になる。その半数は第二種兼業農家であるが、専業農家も5戸存在する。販売金額別では200～1,000万円が11戸、200万円未満が21戸である。経営規模をみると1.0ha未満の小規模な農家が多い反面、2.0ha以上の農家も6戸あり、ばらつきがみられる。カキ栽培面積が1ha前後である4戸の農家では、養鶏(ブロイラー)や養豚といった畜産も行うことにより所得の増加を図っている。しかし、稲作を行っている農家は多くない。これはカキ栽培と稲作では収穫時期が重なり、労働力不足をも

たらずうえに収益性の面からみてもカキ栽培の方が有利なためといえる。「カキ栽培農家」の分布をみると、山麓部の山根集落から真家集落に多くみられる。特に真家集落では、商品作物として導入したのも早く、また経営規模も大きい専門的な農家が集まっており、カキ栽培の核心地となっている。一方、南部の郷中や桑ノ内、千本などの集落にも何戸か「カキ栽培農家」が存在するが、これらは遅れて栽培を開始した農家であり、その規模も小さい。

「畜産農家」の類型には6戸が含まれており、専門農家が3戸、第一種兼業農家が3戸となっている。この類型の農家の販売金額は大きく、3戸が1,000万円以上をあげている。経営規模では1.0～2.0haの層が4戸と最も多い。畜産の内容は、

第3表 八郷町真家地区における農業経営類型別の農家数(1993年)

農業経営 類型	農家数(戸)			
	総計	専業	第一種兼業	第二種兼業
施設園芸	11	6	5	0
露地野菜作	6	1	3	2
カキ栽培	32	5	11	16
畜産	6	3	3	0
稲作	48	2	3	43
クリ栽培	10	2	0	8
その他	4	0	3	1
計	117	19	28	70

(1991年茨城県農業基本調査および1993年5月の聞き取り調査より作成)

養豚が3戸、養鶏(ブロイラー)と酪農と肉牛育成が1戸ずつとなっている。また、2戸の農家では畜産に加えて稲作も比較的大規模に行っている。この類型の農家は北部の山根集落と南部の真家宿、桑ノ内、千本の集落に分布している。以前は真家宿集落を中心に養豚などの畜産も盛んであったが、収益が不安定であることや労働力不足などの理由から中止する農家が相次いだ。そして、現在分布しているのは、そのような状況のなかで継続している農家である。

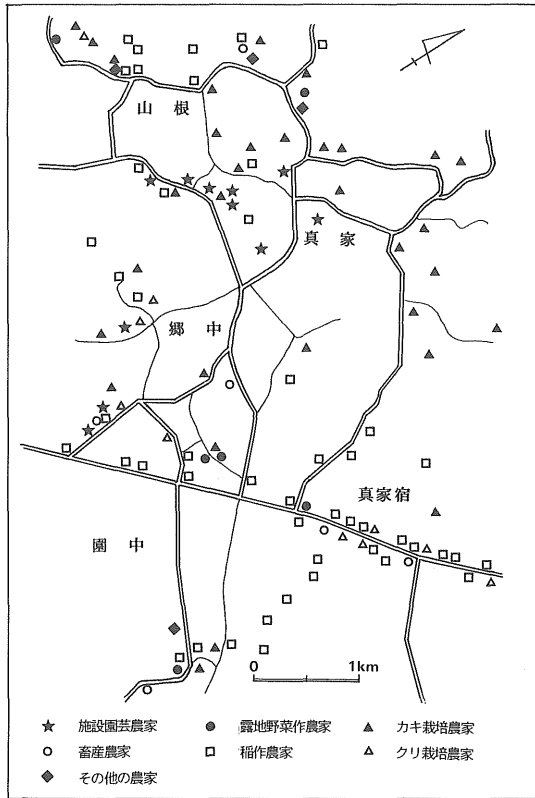
「稲作農家」には全類型中で最も多い48戸の農家が該当する。これは販売農家の4割強に相当する。これらは、2戸の専門農家、3戸の第一種兼業農家を除けば、すべて第二種兼業農家である。経営規模では、2.0ha以上の農家も5戸ほどみられるが、多くは経営規模1.0ha未満、販売金額200万円未満の零細な農家である。半数の農家でクリ栽培も行っているが、商品として出荷できる規模の農家は4戸である。「稲作農家」は、真家宿、桑ノ内、千本、山根といった集落に多く存在している。これは、真家地区では田に利用できる土地が北西から南東に延びる2本の細長い低地とわずかな谷津に限られていることにも起因する。また、自立的な「カキ栽培農家」の多い真家集落では、この類型の農家はない。

「クリ栽培農家」は10戸である。うち8戸が第二種兼業農家で、残り2戸は高齢者世帯の専門農

第4表 八郷町真家地区における農業経営類型の特徴(1993年)

農業経営 類型	農産物販売金額別農家数(戸)			経営規模別農家数(戸)		
	～200万円	200～1,000万円	1,000万円～	～1.0ha	1.0～2.0ha	2.0ha～
施設園芸	0	4	7	2	8	1
露地野菜作	1	4	1	2	3	1
カキ栽培	21	11	0	14	12	6
畜産	0	3	3	1	4	1
稲作	45	3	0	28	15	5
クリ栽培	10	0	0	9	1	0
その他	1	3	0	0	4	0
計	78	28	11	56	47	9

(1991年茨城県農業基本調査および1993年5月の聞き取り調査より作成)



第11図 八郷町真家地区における農業経営類型の分布(1993年)

(1991年茨城県農業基本調査および1993年5月の聞き取りにより作成)

家である。このタイプの農家は、販売金額で全戸が200万円未満、経営規模も1戸を除けばすべて1.0ha未満とともに最低のレベルにあり、零細なものとなっている。これらの農家は、真家宿や郷中、白幡などの集落で多くみられる。真家宿集落では早くからクリ栽培が行われていたが、郷中集落や白幡集落では兼業化の進展に伴い、省力的な作物であるクリの面積が広がっていった。そして、なかには半ば放棄されて「クリ山」といわれる状態の土地も出現した。また、山根集落や真家集落で「クリ栽培農家」がみられないのは、すでにカキ栽培が行われていたことによる。

真家地区の農家は大きく「施設園芸農家」と「露地野菜作農家」、「畜産農家」や一部の「カキ栽培

農家」などの経営規模の大きい自立経営農家と、「カキ栽培農家」や「稲作農家」、「クリ栽培農家」といった零細で消極的な経営を行っている兼業農家の2つに分けることができる。多数の零細な兼業農家に対して自立経営農家はごくわずかであり、真家地区の農業を性格づけるものとは言いがたい。しかし、これらの農家の経営は、個々の農家の裁量に基づいて行われており、多様な展開をみせてきたこの地域の農業の先駆となってきた。そこで、次節では自立経営農家の具体的な経営内容について検討する。

3) 自立農業経営の事例

a. 施設園芸(キュウリ)農家

この農家は、経営主と妻の2人で、施設によるキュウリの生産とカキの栽培を行っている。ただし、カキの収穫時にのべ70～80日間、キュウリの摘果時にのべ20～30日間、親戚の手伝いを受ける。

この農家は八郷園芸団地組合の構成員であり、キュウリの生産は園芸団地の温室2,000m²で年間2回行っている。2月に定植したものを3～6月に収穫し、9月に定植したものは10～1月に収穫する。7～8月はキュウリの生産は行わず、温室内に牧草を播種し、生育した牧草をすき込むことにより地力回復を図っている。この農家は生産したキュウリを市場と東京都内の生協の両方に出荷している。

八郷町農協の生協との契約は半年ごとに更新され、作付計画が決定されている。また、この時点で両者の合議によって価格が決定される。生協からの注文は1週間単位でなされ、その数量は納品の2週間前に農協に連絡される。さらに、農協が作付面積によってこの数量を生産者に配分する。八郷町農協で生協出荷を行っているハウスキュウリの生産者は27名であるが、この農家は12～2月頃は生産量の大部分を生協に出荷する一方で、その他の時期は市場出荷を主体としている。これは、他の生産者との出荷数量の配分によるものである。

一方、カキは170a栽培しており、うち100aが

富有であり、70aが西村早生である。西村早生は市場に出荷されるが、富有は、他の多くの生産者と同様、ほぼ9割が庭先販売される。水田は園芸団地に貸しており、水稻の栽培は行っていない。

b. 施設園芸（花卉）農家

この農家は、経営主と妻、息子、母の4人で、施設による花卉栽培を行っている。その他、10～3月の6か月間は臨時雇用者を3～5人ずつ雇用している。

この農家も八郷園芸団地組合の構成員であり、園芸団地の温室2,000m²および自宅に隣接したビニルハウス2,000m²でチューリップを生産している。1,000m²当たり1回18万球を植付けるが、園芸団地の温室ではこれを年間2回生産し、合計約72万本を生産する。さらに、宅地に隣接したビニルハウスで50万本を生産している。チューリップは切花として出荷される。切花は、東京の荷受会社を通して、静岡から岩手までの広範囲にわたる35市場に出荷している。また、球根³⁰⁾は、富山県や新潟県から購入する他、オランダからも直接輸入している。

チューリップの促成栽培には、休眠打破のための低温処理が必要となるが、そのための低温倉庫は個々の生産者が装備している。この農家も、1968年頃に銘柄推進産地としての補助金を利用し、堆肥小屋を改造して低温倉庫を建設した。さらに、前述の園芸団地の建設などかなりの資本を投下しており、本地区にみられる資本集約的農業の典型となっている。

真家地区の花弁生産者6名および柿岡の生産者1名の合計7名で八郷花卉組合を組織しており、茨城県花卉組合連合の下部組織となっている。

この農家は花卉生産の他に水田50aで水稻を栽培しているが、育苗、田植以外は作業を委託している³¹⁾。また、畑120aはほとんど利用しておらず、耕作放棄地となっている。

c. 露地野菜作農家

この農家は、経営主とその妻との2人で、露地野菜栽培と養豚を行っている³²⁾。露地野菜の栽培は1haの畑で行っており、野菜の種類は、カブ、

トウモロコシ、キャベツ、ダイコン、ハウレンソウ、およびチンゲンサイである。このうちカブとキャベツは1年間に2回生産する。

1年間の野菜栽培に関する作業は次のようになっている。カブは、まず1月10日頃に約10a播種され、これは3月下旬～4月下旬に収穫される。トウモロコシは30a栽培されており、3月20日頃に播種、6月下旬～7月下旬に収穫される。これらの2品目は生育期が寒冷な時期のため、その栽培にはビニルトンネルが用いられる。キャベツは、約60aずつ2回生産される。1回目は、2月下旬に播種し、育苗したものを4月上旬から15aずつ4回に分けて約1週間おきに圃場に定植する。これを収穫するのは6月下旬～7月下旬となる。2回目は、6月下旬に播種、8月20日頃から15aずつ4回に分けて定植し、10月上旬～11月下旬に収穫する。ダイコンは20a栽培しており、8月下旬と9月上旬に10aずつ2回に分けて播種する。これは10月中旬から収穫される。9月上旬～下旬には再びカブを10a程度播種し、10月上旬～下旬に収穫する。また、キャベツの収穫が早く終了した圃場にはハウレンソウを約10a、チンゲンサイを約1a栽培する。これらは、10月中旬に播種され、12月上旬～下旬に収穫される。

また、この農家は養豚を行っているが、42頭の母豚を飼養し、一貫生産を行っている。豚は生後5か月半～6か月で体重が70～75kgとなり、販売される。したがって、1年間に2回生産することができ、年間約650頭を生産している。生産された豚は茨城町の中央食肉公社に出荷される。

その他、水田60a、陸田40aを所有しており、水稻を栽培している。

d. カキ栽培農家

この農家は、経営主と妻の2人で、カキ栽培を中心とし、プロイラー飼養を組み合わせた農業経営を行っている。その他に、20aのクリ、23aの水稻を栽培している。雇用労働力はないが、後述のカキの全切りは他地域に居住している兄弟に手伝ってもらっている。

カキの栽培面積は140aであるが、品種別には

西村早生が30a、松本が10a、富有が100aである。10a 当たり約50本の木が植えられおり、園内には、雑草の繁茂と夏場の乾燥を防ぐため、イタリアンライグラスが植えられている。また、樹木は作業が容易なように低く仕立てられている。

カキ栽培の1年の作業の概要は次のようになっている。まず、1月から芽が出始める3月までは剪定の作業を行う。3月から4月には、カキ園の全面に化学肥料や鶏糞、油粕などを散布する。5月20日前後に1回目の消毒を行う。消毒は10日に1回程度の割合で、天候によって異なるが、9月頃まで続けられる。摘蕾、摘果は1枝に1個の果実を残すようにする³³⁾。果実がある程度肥大すると、形状の悪いものを選んで摘果する。収穫は西村早生が9月中旬から10月下旬まで、松本が10月中旬から10月下旬まで、富有は11月上旬から行われる。カキは霜に数回当たるとへたのまわりが黒変して商品価値を失うので、「全切り」と称して、11月下旬には完熟していない果実も含めてすべて収穫してしまう。全切りされた果実は着色のよいものから出荷され、12月上旬までには出荷は終了する。

収穫されたカキは、出荷の際には選別機を用いて2S、S、M、L、2Lないし3Lの6階級に選果され、箱詰めされる。また、西村早生は果実に渋が入ることもあるので、渋が入った果実の渋抜きを行う必要がある。富有の大部分は庭先販売され、土浦や水戸、東京からも常連の顧客が購入に来る。また、宅配便で地方発送も行っている。

ブロイラーは、1回当たり4,000羽を飼養し、年間4回生産する。ブロイラーの飼養は大手食品会社との契約に基づいてなされ、価格が保証されているため農業経営の安定に寄与している。鶏糞はカキ園に投入して自給肥料として利用している。

4) 現在の就業構造

ここでは、真家地区の真家と小堀の両集落を取り上げて、世帯員の就業構造について検討する(第5表)。1993年5月の聞き取り調査によると、真家・小堀集落の40戸のうち32戸が農家で、8戸が

非農家である。農家のうち専業農家が11戸、第一種兼業農家が10戸、第二種兼業農家が11戸である。

専業農家を農業経営類型別にみると、「施設園芸農家」が6戸、「カキ栽培農家」が5戸になる。これらの農家の多くは、労働集約的な自立経営を行っている。世帯主の年齢層は40歳代と50歳代が中心であり、彼らを含めて二世代以上にわたる世帯員が3人ないし4人、農業に専業的に従事している。さらに、後継者のいる農家は5戸あり、就学者の1人を除く全員がすでに農業に従事している。しかし、番号11の家のように高齢者だけで零細な農業を行っている例もある。

第一種兼業農家には、「施設園芸農家」が2戸、「カキ栽培農家」が6戸、「畜産農家」と「稲作農家」が1戸ずつ含まれている。番号19と番号21の農家を除けば、これらの農家の経営耕地面積は専業農家のそれと遜色はないが、農業労働力は主として50歳代から60歳代の世帯主の世代に依存している。世帯主世代のほとんどは農業専従であるが、次世代には農業専従者はいない。次世代のうち農業と兼業を組み合わせている者は9人おり、全員が兼業を主としている。彼らの兼業内容をみると、男性は全員が恒常的勤務、女性は全員が臨時雇いである。また、農外就業のみに従事している者は20歳代を中心に8人おり、自営業の1人を除くとすべて恒常的勤務である。後継者のいる農家は8戸ある。

第二種兼業農家では、販売を行っていない2戸の農家を除けば、「カキ栽培農家」と「稲作農家」に分けられる。これらの農家の経営規模は、総じて100a未満と小さい。農業専従者は、前世代の高齢者に多くみられ、主要な農業労働力となる世帯主世代のほとんどは男女とも兼業に従事している。彼らの年齢の中心は40歳代であり、主たる兼業は第一種兼業農家の場合と同様、恒常的勤務である。また、次世代には就学者が多く、職業に就いている者は少ない。

恒常的勤務に従事している44人のうち、農家の世帯員で農業と兼業している者は21人、恒常的勤務のみの者は8人、非農家の者は15人となってい

第5表 八郷町真家・小堀集落における世帯の就業構造(1993年)

番号	専兼業	農業経営 類型	経営 耕地 面積	世帯員の年齢および就業状況					
				世帯主世代		前 世 代		次世代およびその他 (m:男 f:女)	
				男	女	男	女		
1	専業農家	施設園芸	256a	62□	59□		84×	m 30□	f 29□
2		施設園芸	185	74□	77□				
3		施設園芸	180		53□		76□	m 27□	f 24□
4		施設園芸	145	44□	45□	66□	66□		
5		施設園芸	132	51□	49□		77□	m 25□	
6		施設園芸	103	45□	42□	67□	69□		
7		カキ栽培	293	59□	54□		83×	m 24□	
8		カキ栽培	170	42□	39□		67□	f 89×	
9		カキ栽培	150	86□	72□				
10		カキ栽培	123	59□		91□		m 50×	
11		カキ栽培	49		66□		81□		
12	第一種兼業農家	施設園芸	190	53□	48□		84×	m 26○	f 23● m 20○
13		施設園芸	171	51□	49□	80□	81□	m 26● m 24● m 21●	
14		カキ栽培	287	61□	61□			m 42○	f 37△
15		カキ栽培	223	62□	62□			m 33○	
16		カキ栽培	170	53□	53□		80×	m 25○ m 23○	
17		カキ栽培	163	65□	61□			m 37●	
18		カキ栽培	110	66□	57□			m 33★	
19		カキ栽培	92	56□	58△			f 20●	
20		畜産	183	58□	54□			m 33○	f 33△
21		稲作	70	61×	58□		83×	m 27●	
22	第二種兼業農家	カキ栽培	183	44☆	38☆	72□			
23		カキ栽培	96	42△	42○	68□	64□		
24		カキ栽培	86	36○	31×		58□	f 79×	
25		カキ栽培	78	40○	40□		78□		
26		カキ栽培	70	41○					
27		稲作	92	39○					
28		稲作	72	63×	61○			m 30○	
29		稲作	35	52○	49○				
30		稲作	23	56○	56○		81×	m 28●	
31		販売なし	40	42○	43□	66□	66□		
32		販売なし	15	41○	35○		69×		
33	非農家			60●	59●			m 31●	f 27●
34				45●	45●	72★			
35				45●	40●				
36				42●	45●				
37				43●	48★				
38				29●			55×	m 25●	f 26●
39				43●					
40				63×	62×				

注) 数字は年齢, 記号は就業状況を表す。なお, 就学者については省略した。

□: 農業のみに従事

●: 恒常的勤務のみに従事

○: 恒常的勤務と農業に従事

▲: 臨時雇いのみに従事

△: 臨時雇いと農業に従事

★: 自営業のみに従事

☆: 自営業と農業に従事

×: 何にも従事していない

(1993年5月の聞き取りにより作成)

真家・小堀集落の就業構造についてまとめると、経営規模の大きい自立経営の専業農家では農業労働力は確保されており、後継者のめどもついていることから、今後もこの経営を維持していくことが可能であるといえる。それに対して第一種兼業農家では、農業労働力の中心である世帯主世代がすでに高齢であり、現在の農業経営を維持するには農外就業に就いている次世代の動向が問題となってくる。一方、第二種兼業農家では経営規模が大きくないことから、現在恒常的勤務との兼業をしている世帯主が農業に従事している限り、農業は続けていくことは可能であるといえる。しかし、その後は次世代の大半を占める就学者が農業以外に就職することにより、農業を中止する可能性も大きい。

り立っている。真家宿集落は、上組・下組の2組をそれぞれ2班に分けた4班から構成されている。小堀集落は上組と下組から構成されており、構成する家は多少異なるが、上組と上班、下組と下班がほぼ対応している。山根集落は班と組の組織が一致している。園中区は、桑ノ内、千本両集落からなり、それぞれの集落が組、班の機能を兼ねている。郷中、白幡両集落は区の内部が組・班に区分されていない。

各区には役員として、区長が1名ずつ置かれている。区長の任期は山根集落と真家宿集落が2年であり、他の区では1年である。区長は原則として輪番制で選ばれ、現在では特定の人間が長く務めるということはない。それぞれの区では、月1回定期的に会合を持つ白幡を除くと、年に数回の頻度で不定期に会合が開かれる。この会合は常会と呼ばれ、区長や農家組合長などの役員改選や集落の予算決算、また子供会の活動の討議といった集落内の行事や活動に関する運営の話し合いである。常会は区の単位で行われるが、園中区では桑ノ内、千本の集落ごとに、また真家宿集落では上組、下組の組単位で行われる。しかし真家、小堀両集落では、現在常会すら行われておらず、区の構成員が顔をあわせる機会はほとんどない。真家・小堀集落で唯一残っている区の行事には、毎年1月に行われる新年会がある。

各区には集落共用の膳枕があり、冠婚葬祭や、どの区でも行われている新年会の際にはこれを用いる。例えば真家宿集落では、新年会は1月1日に行われる。場所は区長宅であり、班長が手伝う。真家宿では、新年会は上組と下組で別々に行われ、上組では各家から2人（夫婦）、下組では同じく1人（夫）が参加する。会費は1戸当たり1,000円程度であり、料理は、当家と呼ばれる当年度の新年会の世話役宅で準備する。当家は輪番制である。時間は、午前10時頃から午後3時頃までであり、元日の恒例行事となっている。新年会の期日や方法は各集落によって異なるが、各集落において欠かせない新年の行事として定着している。

組は集落において共同で営まれる行事や活動に

おけるまとまりである。組を単位として行われる行事としては次のようなものがある。第1は納税業務である。住民税や農業協同組合の組合費は、組を通して一括して納める。第2は溝さらいや芝焼き、空き缶拾い、道普請といった各種の共同作業や奉仕活動である。第3には、葬式の際の互助組織としての機能である。さらには民間信仰の単位としても、組は機能している。

先に述べたように、真家、小堀、真家宿の各集落では、組とは別に班が組織されている。班は真家地区における自治組織の最小単位である。班の機能は、町から区を通じてくる連絡を、各戸に伝達する回覧版をまわす地区割りである。組と班が一致している集落では、組を単位として回覧版をまわしている。

2) 公民館

真家地区で、区単位で公民館を持っているのは、山根集落だけである。また白幡集落にある園部小学校跡地には、旧園部村全体を対象とした園部地区公民館が建設され、地域住民の様々な活動の場として重要な役割を果たしている。

山根公民館は、町の助成に加え山根集落全戸の平等負担により建てられたものである。ここでは、山根集落の常会をはじめとする区の行事（新年会や愛宕山講）などに使用されている。園部地区公民館は、真家地区を含む旧園部村全体の公民館である。1992年度の公民館利用記録を見ると、最も使用頻度が高いのは、社交ダンスサークルであり、2団体がそれぞれ週2回と週1回ずつ利用している。他にも園部地区の子供会、老人会、婦人学級や農業協同組合の会合、小学校のPTA、白幡集落の常会など多目的に利用されている。また公民館の広場では、ゲートボールが盛んに行われており、レクリエーション機能を兼ねた、地域の人々の社交場になっている。

Ⅳ－2 同族組織

真家地区の本家一分家関係には、いくつかの傾向がみられる。第1に、山根、小堀といった台地上の集落では、水の利便性にすぐれた山際に本家

が立地し、そこから台地の下にかけて分家する傾向がある。第2に、郷中や白幡、真家宿、千本といった南東部の集落では、本家を中心としてその周辺に分家が存在している。また桑ノ内の街道沿いでは、本家一分家関係にある家が少ない。

真家地区では、総じて同族組織の結びつきは弱く、葬式を除けば、ほとんど儀礼的なつきあいにとどまっている。葬式の際においても組・班といった地縁的な組織が優越しており、同族組織は形骸的なものとなっている。しかし同族で共同の氏神を祀り、祭祀を行っている場合もある。白幡のKu家では、本家を中心に同族5家の氏神として八幡神社を祀っており、毎年8月15日に一族で祭事を行っている。

Ⅳ-3 生産組織

真家地区は、農業が主産業であるにもかかわらず、生産組織が充実しているとはいえない。むしろ生産性の高い集約的商品農業経営者をはじめとして、個々の農家が独自に農業経営を行う傾向が強い。

八郷町農業協同組合の下部組織として、農家組合がある。かつては農業資材などの共同購入の単位として機能していたが、現在では農業協同組合関係の情報を伝達する組織にすぎなくなった。真家地区には、山根、真家、小堀、郷中、白幡、園中、千本、真家宿上、真家宿下、長原の10の農家組合があり、区長とは別に農家組合長が置かれている。

1970年頃までは、カキや柑橘類の生産組合があったが、現在では生産組合はなく、カキの出荷組合だけが残されている。すでに述べたように、園部柿組合と農業協同組合の柿部会という2つの生産組合がある。真家地区では園部柿組合を通して出荷する農家が多い。

転作促進対策特別事業として、1979年にできた小堀集落の園芸団地では、7戸で農事組合法人八郷園芸団地組合を作っている。この法人が、管理棟や農機具倉庫、油槽、井戸の管理を行っている。また花卉関係では、花の栽培者7人で八郷花卉組

合を作っており、茨城県花卉組合連合の下部組織となっている。

真家地区は、石岡台地土地改良区園部川地区に含まれ、ここでは区画整理や用排水路・表道などの改修を含む土地改良事業が、1985年に完成した。土地改良区には412人の組合員がおり、うち97人が真家地区に属している。

Ⅳ-4 社会組織

1) 子供会

真家地区には、真家・小堀・山根集落、郷中・白幡集落、真家宿集落、桑ノ内・千本集落をそれぞれ単位とする4つの子供会が組織されている。各子供会にはその地区の小学生が自動的に入会しており、小学生の子供を持つ父兄が中心となって世話をしている。子供会の活動としては、春の歓送会やレクリエーション、空き缶拾いなどの奉仕活動、夏の花火大会やラジオ体操、宿泊会、海水浴（プール・海）などの野外活動、冬のクリスマス会などがあげられ、小学生の学校外での地域活動を促進する役割を担っている。しかし近年では、小学生の減少や通勤兼業者の増加などに伴い、子供会の統合や活動の簡素化が進んでいる。

例えば桑ノ内、千本両集落は、1988年頃までは別々に子供会を組織していたが、近年子供が減少し、現在は園中区として一緒に行っている。また1960年代までは、桑ノ内、真家宿、千本の3集落でバスを1台チャーターして、子供会で旅行に出かけていた。真家集落の子供会では、岩間町の愛宕山へ元朝参りを行うこともあったが、現在では行われていない。

こうした地区単位の活動の他に、子供会活動の一環として、園部地区の球技会（ソフトボール会）も行われている。

2) 青年会

青年会は真家地区を単位として組織されているが、参加者はほとんどおらず、休会状態となっている。1970年頃には、青年会が主体となって、2～4人で夜警を行ったり、夏の盆踊りや秋に行われる作物の品評会を主催していたが、現在ではこ

これらの活動は行われていない。青年会組織の衰退は、青年会の担い手層の減少や生活スタイルの変化、および時間的余裕の減少等に起因していると考えられる。

3) 婦人会

八郷町婦人会の下部組織が旧園部村の範囲で活動しており、その主なものが婦人学級である。婦人学級では、園部地区公民館を活動場所として、料理や生け花、編み物、手芸、パッチワークの講習会などが行われている。

この旧園部村の地区全体を対象とした婦人学級の他にも、集落の範囲で婦人のグループが組織されている場合もある。桑ノ内集落では、40歳くらいまでの婦人を対象に若妻会が組織されている。若妻会は元々信仰組織である子安講を母体とする組織であり、年2回(4月と11月)の子安講と、年1回の旅行、および新年会がその主な活動である。年会費は2,000円である。また同じく婦人の組織として、60歳以上の婦人で組織されるむつみ会がある。むつみ会は年に2～3回の旅行や新年会、寺社参詣などがその主たる活動である。

4) 老人会

旧園部村には4つの老人会が組織されており、真家地区の老人会は、第三百寿会と呼ばれている。老人会には、60歳以上の希望者が加入している。毎月12日に定例会を開き、活動内容を決めている。主たる活動は年3回の温泉旅行であり、バス1台で北関東の温泉場に出かけることが多い。参加者は約20～30人である。また旅行の他にも、老人会で新年会や忘年会を行ったり、村社である春日神社の境内を年2回清掃するといった奉仕活動も行っている。

5) 消防組織

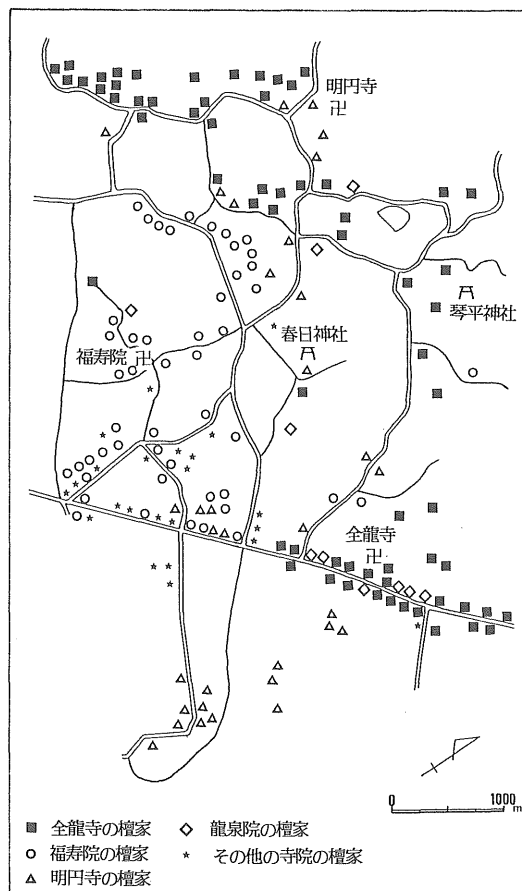
真家・小堀・山根集落を一つの単位として、非常備の消防団が組織されている。聞き取りによると、1950年頃までの腕用ポンプが使用されていた時代には約40人ほどの団員がいたが、1960年代になって自動ポンプが使用されるようになると、団員は約20人ほどに減少した。1992年度における消防団の訓練には、58人が参加した。その他の地区

でも1970年代までは非常備の消防団が組織されていたが、真家宿集落の南東に新興住宅地(第五トール・ホーランド)が造成されると、地区内の非常備の消防団は消滅し、町の常備消防団に肩代わりされることになった。

Ⅳ-5 宗教組織

1) 氏子組織

真家地区では、全戸が春日神社の氏子になっている。1950年代までは、山根集落と真家集落の境界部にある琴平神社において祭礼は営まれていた。しかし現在では、この春日神社を中心に祭礼が行われている。



第13図 八郷町真家地区における檀家組織 (1993年)

(1993年5月の聞きとりにより作成)

1960年頃までは、御輿も出てにぎやかに祭が行われており、祭礼の回数も年2回（6月と11月）であった。しかし現在では年1回である。

神社祭礼の運営は、各区から選ばれた責任役員（氏子総代）によって行われる。当社には宮司がないので、石岡総社宮の神官が来て、祝詞をあげる。各区の区長が石岡総社宮の神官からお札をもらい、氏子総代を通して各戸にお札を配る。

2) 檀家組織

真家地区には、曹洞宗の全龍寺と真言宗の福寿院、そして浄土真宗の明円寺という3つの寺院がある。寺院別の檀家の分布を示したのが第13図である。全龍寺は今から約500年前に創建されたと伝えられ、山根、真家、真家宿の各集落を中心に約70戸の檀家を有している。元は山麓部にある全龍寺池の北にあったが、数度の災禍を受け、江戸中期に真家宿集落の現在地に移転した。1993年5月には、山林の売却益により近代的な本殿が建立された。責任役員は10名おり、その内の3人が山根、真家、真家宿の各集落の代表者である。主な行事としては、8月20日の施餓飢会と、11月の最後の日曜日に行われる開山忌がある。施餓飢会は檀家の約半分が集まり、住職が経をあげる。開山忌は、檀家総供養の日であり、ほぼ全檀家が参加する行事である。かつては曹洞宗の総本山である永平寺に檀家が参拝することもあったが、最近では行われていない。

郷中集落にある真言宗の福寿院は、小堀、郷中、白幡の各集落を中心に、約30戸の檀家を有している。檀家が集まる主な行事としては、弘法大師の命日である3月21日に行われる御影供と8月6日に行われる御施餓飢がある。また、3～4年に一度の割合で、本山である長谷寺へ参詣している。この本山参りは、30～40人ほどの参加者があり、バス1台で行くのが恒例である。

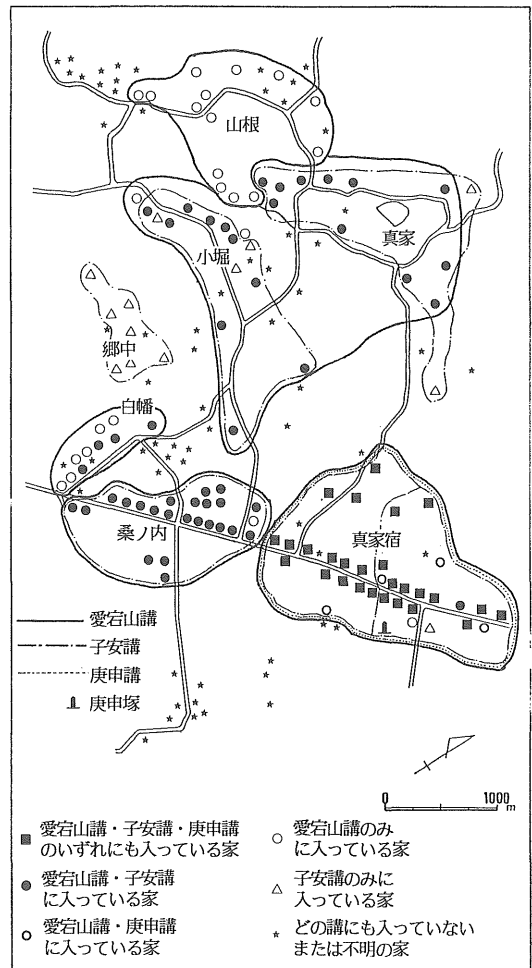
山根集落にある浄土真宗の明円寺は、千本、長原両集落の全戸と山根、小堀、桑ノ内の各集落の数戸を檀家としている。主な行事としては、4月20日頃に行われる報恩講と9月に行われる永代経がある。千本、長原集落が各1班、山根・小堀・

桑ノ内集落が一緒になり1班となり、役員を選出する。近年では、他宗への改宗する家もあり、総じて檀家数が減少している。

3) 民間信仰組織

ここでは、真家地区で現在でも行われている愛宕山講、子安講、庚申講を中心に述べる。各講への参加者の分布、および組織の空間的広がりを示したものが第14図である。

愛宕山講は、郷中と千本を除く各集落で行われている代参講組織である³⁴⁾。また真家、小堀両



第14図 八郷町真家地区における民間信仰組織(1993年)

(1993年5月の聞きとりにより作成)

集落は一緒に代参を行っている。

岩間町にある愛宕山神社は、火防の神として、茨城県下を信仰圏としている。真家宿集落では、1月の第一日曜日に、くじ引きで決められた当家で祝祭が催される。下番と呼ばれる当家の予備役2人が手伝いをし、一番当、二番当と呼ばれる代参者それぞれ2人が、愛宕山に代参し、お札を貰ってくる。この当家、下番、代参の各当番は、基本的に輪番制である。

当家では1年間、愛宕山と呼ばれるお堂をお祀りする。もしこの1年間に当家で不幸が起こると、お堂をすぐに下番の家に移さなければならない。祝祭の最後には、あらかじめくじ引きで決められた翌年の当家まで、全員でお堂を送っていき、愛宕山山講は終了する。会費は1,000円である。

子安講は、年2回、春と秋に、女性が当家に集まって、猿田彦の掛軸の前で、観音経をあげ、独特の節回しの御詠歌を歌い、その後で直会をする信仰行事である。山根、千本両集落を除く各集落で行われている。現在では信仰行事としての意味は薄れ、次第に女性の慰安日という色彩が強まっている。

小堀集落では、農作業が一段落した4月と10月の日曜日あるいは土曜日に子安講が行われる。講のメンバーは20歳代から50歳代の女性である。当日は大和村にある雨引観音に代表者が詣で、お札をいただいてくる。午前11時頃に当家にいって、お札に線香をあげ、子供が健やかに育つように祈る。寿司屋から出前をとり、子安様にお供えをした後、直会を行う。費用は講員で平等に負担する。また8月18日と19日に当家の人と次回の当家の人が幹事となって、一泊のバス旅行に出かける。

以前には真家集落や山根集落をはじめとして、各地区で庚申講が営まれていたが、現在でも残っているのは、真家宿集落だけである。真家宿では、12月の第一日曜日に、輪番制のくじ引きで決められた当家に夫婦2人が招待され、本膳式の会食を行う。また3年に一度、男だけで塚つきと呼ばれる信仰行事を行う。これは真家宿の共有地にある庚申塚の回りに3年分の会食に用いた箸を立てる

ものである。前日に当家で餅を4升つき、当日庚申塚にお供えする。

4) 真家みたま踊り

8月15日に真家地区を単位としてみたま供養の踊りが行われ、茨城県無形文化財に指定されている³⁵⁾。1960年頃までは、旧暦で行われていた。当時は5～8年に一、二度の頻度であり、3日間にわたって、朝から夜遅くまで明円寺、全龍寺、福寿院の3寺の檀家すべてをまわり、踊りが行われた。現在では、この3つの寺の境内と新盆の家々のうち、希望者宅で踊りを行う。真家みたま踊り保存会が中心となり運営されている。真家地区の全戸がこの保存会に加入することになっているが、近年では関心が薄れ、みたま踊りへの参加人数は減少している。そこで学校を通して真家地区の小・中学生に参加を呼びかけている。

5) その他の民間信仰組織

現在では行われていないが、真家地区では次のような民間信仰行事が以前には行われていた。

加波山講は第二次世界大戦前まで行われていたものであり、加波山の神官が集落を廻り、五穀豊穡、家内安全を祈願した梵典を祀るものであった。加波山神社の御輿を地区の若手が担ぎ、各家を廻った。当時の梵典は現在、春日神社に奉納されている。

二十三夜講は二十三夜の深夜12時頃に、当家に集まり、おはぎを作って男女で食べる行事であった。集落内に二十三夜講が建立した石碑が数多くあり、昔は盛んであったことがわかるが、現在ではどの集落においても行われていない。

また明治・大正期には、堂々めぐりと呼ばれる信仰行事が高齢者を中心に行われていた。これは、大きな数珠を順番に送りながら、集落内の小祠や石碑など宗教施設の前で赤飯や餅をお供えし、念仏を唱えるものである。また疱瘡ばやし、豊年踊り、虫払い、雨乞い等の民俗行事もかつては地区の行事として行われていたが、現在では行われていない。

V むすび

茨城県八郷町の農村は首都圏外縁にありながら、比較的農業的性格を強く残してきたが、ここでも都市化の波は確実に影響を及ぼしてきており、それによって農村生活は、外見から判断できるよりも機能的にはさらに大きく変化している。しかも、その変化は集落によっても、それを構成する世帯によっても様々な形で進行している。この報告では八郷町真家地区において、土地利用と景観、農業経営、そして生活組織と行事といった側面から、農村の最近の変容を明らかにした。

真家地区は地形的にみると、北西から南東方向に筑波山東側山塊と八郷丘陵、東茨城台地の順に配置され、さらに丘陵と台地に園部川上流部の2条の沖積低地が入り込んでいる。西の山麓では礫を含む粘土質土壤中、丘陵上では赤みを帯びた黒ボク土、そして台地では黒味を帯びた黒ボク土となり、土壌的にも西から東へ推移している。また、北西部の山麓では冬季に気温の逆転層がみられ、温暖で霜害も少ないが、南東部にゆくにしたがって気温が低くなる。

この地域では集落の起源や発展過程を示す文書類が限られているため、豊富に残されている石造物類を手がかりに集落を歴史的にみると、西の山麓部の真家・山根といった集落が最初に形成され、しだいに東の台地や平野に開発がのびていった。東の台地の開発は、明治期以降も続けられた。

こうした自然環境や集落ごとの形成の時期と過程の差が、集落による土地利用や経済活動の違いにも反映している。とくにこの地区における東西の差が、重要な意味をもっている。

明治中期の土地利用をみると、真家地区の北西部から北部にかけては山林が広がっており、その南の2条の浅い谷には水田が開かれており、谷の周辺が畑と宅地となっていた。山根や真家、小堀といった古い集落がここに立地していた。また、谷のさらに南の台地の多くは畑として利用されていたが、かなりの平地林も残っていた。ここには真家宿や桑ノ内、千本などの新しい集落があった。

山根や小堀、郷中、千本などの集落は疎塊村をなしていたが、真家集落は散村的性格が強く、白幡と桑ノ内、真家宿の各集落は路村をなしていた。

昭和初期になると、南東部の真家宿や千本の集落付近では宅地が拡大し、さらに台地上や山麓の林地が畑地にかわった。この頃の土地利用は、水田と麦類や陸稲、甘藷、落花生などが栽培される畑、桑畑から成り立っていた。この状態は1950年頃まで基本的に変化しなかったが、第二次世界大戦後には山麓や丘陵地にミカンやカキの樹園地や落葉などを利用した温床とガラス障子によるキュウリ栽培がみられるようになった。1960年以降ビニールの普及によって野菜や花卉の施設園芸が拡大し、山麓部からカキ栽培が丘陵や水田にまで広がり、さらに南東部ではクリやナシの栽培が始まった。台地の麦や陸稲、甘藷などの栽培は、露地野菜栽培に転換された。

農業経営の変化をみると、1950年代まで米と麦、豆・いもなどの伝統的な農業を基本にして、養蚕やタバコ、キュウリの促成栽培、カキ栽培などの商業的な農業が時代ごとに組み合わせられていた。商業的な農業が発展するのは、1960年代のカキ栽培の拡大とチューリップを主体とした花卉とキュウリを中心とした野菜の施設園芸の発達であった。他方、1970年代からは農家の兼業化が進み、少数の自立農業経営と、多数の兼業農家に分化するようになり、農家の個別化が進んだ。

真家地区の農家は「施設園芸農家」と「露地野菜作農家」、「畜産農家」や一部の「カキ栽培農家」などの経営規模の大きい自立経営農家と、「カキ栽培農家」や「稲作農家」、「クリ栽培農家」といった零細で消極的な経営を行っている兼業農家の2つに分けることができた。そして、自立経営農家は真家・小堀集落に、兼業農家は郷中や桑ノ内、真家宿などの集落に多く分布していた。

以上のような経済活動を基盤としている真家地区の生活組織を最後に検討した。かつて藩政村であった大字の真家地区は、現在では春日神社の氏子組織やみたま踊りを行う範囲、さらには八郷町全体で組織されている老人会や婦人会などの下部

単位としてのまとまりをもつ程度にすぎない。また、真家地区にある8つの区は、園中が2つの集落に分かれるほかはそれぞれが集落をなし、八郷町の行政の末端の伝達単位であるとともに、日常の生活やコミュニケーションの単位となっていた。しかし、山根や小堀、真家宿といった比較的密なつきあいを行う集落と、真家のような一年に集落の構成員が顔をあわせるのは新年宴会だけという集落もあった。区のなかには、年齢階層や性別のグループによる社会組織やレクリエーション組織も少なく、愛宕講や子安講、庚申講といった民間信仰のなごりが残っている程度である。区をいくつかに分ける班や組は、葬式の際の互助単位である以外は、重要な機能をもっていない。生産組織や同族組織も重要な機能を果たしているもの

はみられなかった。このように生活組織からみると、住民相互の結びつきは比較的疎遠で、農村特有の密なコミュニケーションをもつ集落とはいえなかった。ただし、他地域からの転入者が古くからの集落の構成員になるには、現在でも煩雑な手続きが必要な集落が多い。

近年さらに真家地区の生活組織の弱体化の傾向が著しく、区や班は行政の末端伝達組織という性格を強め、民間信仰組織は信仰の要素が希薄になり、かろうじてレクリエーション的な組織として存続している。子供会、老人会、婦人会といった町の組織の下部機関としての集まりは、独自の活動が不活発で、さらに生産組織は農業経営の個別化によって地域の範囲を越えた専門的組織になっている。

本稿を作成するにあたり、八郷町役場、八郷町農協、石岡地区農業改良普及所の方々に御協力いただきました。現地調査に際しましては、真家地区の多くの方々のお世話になりました。また、製図の一部は、筑波大学の宮坂和人技官、小崎四郎技官に依頼しました。以上記して厚くお礼申し上げます。

【注および参考文献】

- 1) 山本正三編(1991):『首都圏の空間構造』二宮書店, 486p.
- 2) 高橋伸夫・田上 顕・菊地俊夫(1985):『茨城県八郷町における農業金融と農業経営の地域的展開』人文地理学研究, 9, 145-181.
- 3) 茨城県農地部農地計画課(1981):『土地分類基本調査 石岡』茨城県, 47p.
茨城県農地部農地計画課(1983):『土地分類基本調査 真壁』茨城県, 55p.
- 4) 吉野正敏(1961):『小気候』地人書館, 273-274.
- 5) 宮崎報恩会編(1976):『新編常陸国誌』崙書房, p.512. なお、この真家氏文書については小森正明(1987):『常陸志料』所収「真家氏文書」について、日本史学集録, 4, 22-27. に詳しい.
- 6) 塙 泉嶺(1979):『新治郡郷土史』賢美閣(復刻版), 196-198.
- 7) 中川 正(1983):『集落の性格形成における宗教の意義—霞ヶ浦東岸における二つの集落—』人文地理, 35, 97-115.
- 8) 字神影・長原・細谷・菖蒲田は図の都合上除いてある. 第4図でも同様である. 第3図と第4図はベースとしている図が異なるので、若干ずれが生じる.
- 9) 宮崎報恩会編(1976):前掲5), p.153.
- 10) 江戸期には修験は天台宗もしくは真言宗のいずれかに属して各地に展開していた. また、修験は原則的に葬儀を行うことができなかった.
- 11) 塙泉嶺(1979)によれば、1923(大正11)年の園部村の525戸のうち487戸が農業にたずさわっていた. 塙泉嶺(1979):前掲6), p.198.

- 12) 内閣統計局編 (1930) : 『昭和四年 農業調査結果報告』東京統計協会, 92-93.
- 13) 山本正三・田林 明・小田宏信・林 秀司・原田洋一郎・吉村忠晴・上木原静江 (1990) : 茨城県石下町本豊田地区における生活形態の変容. 地域調査報告, 12, 129-185.
田林 明・林 秀司・川崎俊郎・中嶋則夫 (1992) : つくば市島名地区における集落の変貌. 地域調査報告, 14, 115-136.
- 14) 村上節太郎 (1954) : 日本の柑橘栽培地域の地理学的研究 (1) - 分布限界と栽培先進地 -. 愛媛大学紀要 社会科学, 2-1, 149-182.
- 15) 真家地区を含む筑波山麓一帯は商業的ミカン栽培の北限地帯にあたり, 温暖な山地斜面中腹で栽培が可能である. 1950年頃からは温州ミカンも栽培されるようになった.
岩佐俊吉 (1965) : 茨城県の果樹産地. 農耕及び園芸編集部編『全国園芸特産地ガイドブック東日本編』農耕及び園芸別冊 誠文堂新光社. 77p.
- 16) 岩佐俊吉 (1965) : 前掲15), 76-77.
- 17) カキ園とミカン園の分布については吉野正敏 (1961) を参考とした.
吉野正敏 (1961) : 前掲4), 273-274.
- 18) 石崎 (1970) によると, 茨城県は積算温度からみて, 日本の甘カキ分布地域と渋カキ分布地域の北限付近にあたり, 甘カキ栽培の可能な北限にあたる. 聞き取り調査によると, 千本集落のように気温の低いところでは, 渋が残るときもあるという.
石崎政彦 (1970) : 『現代農業技術双書 カキ』家の光協会, p.22.
- 19) 新治郡園部村の促成栽培については, 下記の文献に紹介されている.
茨城県農会 (1915) : 『茨城県農家副業』188p.
- 20) 関東ローム層中に挟まれる鹿沼パミスの層のことを真家地区ではアワツチという. タバコのヤニを取る石鹸がわりに使われていることもある.
- 21) 元木 靖 (1960) : 茨城県における栗栽培地域. 東北地理, 21, 150-159.
- 22) 杉本尚次 (1969) : 『日本の民家研究』ミネルヴァ書房, p.193.
- 23) 「マテル」は「収納する」を意味し, 利根川両岸地方においては納屋の一般名称である.
柳田國男・山口貞夫 (1975) : 『居住習俗語彙第2刷』国書刊行会, 44.
- 24) このようなクラの造りは, 笠間地方でよくみられるとされている.
山本勝巳・川島宙次・小林昌人 (1971) : 『関東地方の民家』明玄書房, 415-416.
- 25) 八郷町誌編さん委員会 (1970) : 『八郷町誌』638p.
- 26) 八郷町誌編さん委員会 (1970) : 前掲25), 212-214.
- 27) 茨城県農会 (1915) : 前掲19), 64-65.
- 28) 八郷町誌編さん委員会 (1970) : 前掲25), p186.によると, ラッカセイは第二次世界大戦中の食料難により急速に栽培面積が増加し, 戦後も畑面積の大きい園部, 林地区で相当の作付がみられた.
- 29) 八郷町農業協同組合野菜・果物産直協議会 (1991) : 『産直はじめてものがたり』77p.
- 30) チューリップの種球の原価は30円程度であり, 通常, 切花は1本80円程度になるという.
- 31) 委託料は, 耕起が10a 当り5,000円, 代かきが5,000円, 収穫・調整が15,000円である.
- 32) この農家は, これまで収入の約6割を養豚によって得ていたが, 価格の低迷のために, 1994年には養豚経営から撤退することを予定しており, 調査時点においても養豚経営は規模を縮小させつつあった. 将来はビニルハウスも導入し, 葉菜類の周年栽培を行うことを考えている.
- 33) 摘蕾, 摘果の目安として, 農業試験場などでは15葉に1個の割合を推奨しているが, 現実には7~8葉に1個を着果させるようにしている生産者が多いという.
- 34) 郷中では, 1990年頃に, この地区の中心的家であるHa家に不幸があり, それ以来止めてしまった. また千本は浄土真宗の集落であり, 愛宕山講を始め, 子安, 庚申など民間信仰にまつわる行事は, すべて行われていない.
- 35) この部分は, 真家みたま踊り保存会会長の久保田隆夫氏による以下の文献を参考にした.
久保田隆夫 (1987) : 『念仏踊りとその基盤』自費出版, 26p.